

「Panda 杯全日本青年作文コンクール2019」  
入 賞 作 品

# 目次

## ★優秀賞

聖心女子大学 文学部国際交流学科 3年	高塚 小百合 …… 2
フリーター (就職活動中)	南部 健人 …… 3
慶應義塾大学 文学部人文社会学科 2年	清水 若葉 …… 5
学校法人立命館	由谷 晋一 …… 6
京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 5年	大谷 琢磨 …… 7
女子美術大学 芸術学部アートデザイン表現学科ファッションテキスタイル領域	
	勝俣 友加里 …… 9
立命館宇治高等学校 IMコース	西山 佳子 …… 10
東京学芸大学 教育学部中等教育教員養成課程書道専攻 3年	高橋 杏里 …… 12
東京農工大学 工学部機械システム工学科 1年	田頭 尚大 …… 13
慶應義塾大学 法学部法律学科 1年	幸田 遼 …… 15

## ★入賞

聖心女子大学 現代教養学部 1年	石川 春香 …… 17
千葉敬愛高等学校 3年	柳田 華佳 …… 18
和歌山大学 経済学部経済学科 4年	松田 実久 …… 19
日本大学 法学部政治経済学科 3年	徳永 良行 …… 21
神戸市外国語大学 外国語学部 中国学科	北村 美月 …… 22
東京学芸大学附属国際中等教育学校 6年生(高校3年生)	大島 綾乃 …… 24
関東国際高等学校 外国語科 中国語コース	井内 英人 …… 25
東京学芸大附属国際高等学校 1年	佐藤 龍馨 …… 27
京都大学大学院 農学研究科応用生命科学専攻修士 1年	出石 佑樹 …… 28
郁文館夢学園 高校 2年	張替 千翔 …… 30

# 「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2019」

## ★優秀賞

### 紙の城と石の城

・聖心女子大学  
文学部国際交流学科3年  
高塚 小百合

「一日にしてなるのは紙の城である。百年の歳月をかけるのが石の城である」。これは、笹川杯日中交流会に参加して私が思い出した言葉だ。この言葉は、沖方丁氏の小説『光圈伝』の中に出てくる。徳川光圈が明の学者である朱舜水を招き、政治を行う上で大切なことを問うた時、彼はこのように答えた。国の政治に良い結果をもたらす政策とは、目先の利益を追うものではなく、時間をかけ、困難を乗り越えた末に作られるものであるという意味だ。2月に参加した日中交流会での討論テーマは、「少子化現象について～将来を担う私たちができること～」だった。中国と日本の少子化の現状や解決策について話し合ったのだが、そこで驚いたのが、中国人学生たちが日本人・中国人関係なく率直に意見を言い合い熱く議論する姿勢だった。

特にその姿勢がよく現れていたのが、「女性と男性の社会的地位の差が少子高齢化を招いているのか」ということについて話し合った時だった。私の討論グループには東北部出身の男子学生と貴州省出身の女子学生がいて、彼らが特に激しく議論していた。「中国も日本も女性が家庭を守るという意識がまだ根強くて、働く女性は結婚や出産に二の足を踏んでしまう。」という女子学生の意見に対し男子学生は、「中国は共働き家庭が多い。中国の女性は日本の女性に比べて社会進出している。」と反論した。私は白熱する議論にあっけにとられていたが最終的には、「政治の世界で高い地位に就く女性が少ない。政界に女性が増えないと、子育て政策などで女性の声が届きにくい。」という点で一致していた。

また「一人っ子政策」の話題が出た時には、彼らが激しい議論をすることに抵抗がない理由が垣間見えた。男子学生が、地方の農村では一人っ子政策と若者の都市への流出によって、子供に面倒を見てもらえなくなった高齢者が自殺するケースが多くあると発言した。すると、貴州省の出身の学生が、「それは違います。」とすかさず反論した。彼女によると、一人っ子政策は省によって基準が違い、貴州省では複数人子供を産んでもよいそうだ。一人っ子政策はすべての省で共通の政策だと思っていた私にとってこの事実はとても驚きだったのだが、それと同時に、住む地方が違えば常識や考え方が違うということも二人の議論を通じて分かった。中国人が人と議論することや対立することに抵抗がないのは、国土

が広い中国において、地方ごとに常識や考えが違うのは当たり前であり、意見がぶつかることを当然のことと考えているからではないかと思った。日本人は、「空気を読む」という言葉があるように、対立を避け、予定調和を好む傾向が強い。大学の授業では、外国人の先生から「どうして日本人は自分の意見を言うことをためらうの？」と言われることも多い。授業で行うディベートでは、自分の意見を述べたり、人の意見を否定したりするのは気が引ける人が多いのか、なかなか議論が盛り上がらないことが多い。相手の意見に同調していれば、不要な対立を生まないし、早く議論が終わるからだ。私は、日本人には自分の意見や希望をはっきり言う姿勢が足りないと思っている。それに対し、違う意見にも堂々と反論し、実体験や様々な根拠を用いて少子化について述べる中国人学生の姿はとても新鮮に映ったし、もっと中国の人々、特に同世代の学生と社会問題について議論してみたいと思わせた。

いま日本ではグローバル化が進み、異なる価値観や背景を持つ様々な国の人々と関わる機会が増えている。そうすると必ず対立が生まれ、解決しなければならない問題も出てくるだろう。その時に、他人との意見の対立を恐れていると、目先の利益を求める「紙の城」のような解決策しか出ない。良い結果をもたらす「石の城」のような解決策を見出すには、白熱した議論を展開した中国人学生たちのように、対立を恐れず率直な意見を戦わせなければならないと思った。

## 子どもたちの未来のために

フリーター（就職活動中）

南部 健人

三年前のまだ大学生だった頃、横浜の中華街の近くにある学童保育でアルバイトをしていた。その学童は、その土地に宿る歴史もあって、日本人以外に、中国をはじめ様々なアジアの国にルーツを持つ子どもたちも多く通っていて、小さな多国籍社会というような空間でもあった。

アルバイトを始めた理由は、大学で学んでいる中国語を使って、特に中華系の子どもたちの力に少しでもなればと思ったからだった。と言っても、子どもの学習能力は高く、来日して数年でも、すでに流暢な日本語を操る子が少なくなかった。そして何より、子どもたちの遊びには、言語はそれほど大きな障害ではないと働き始めてすぐに僕は知った。業務のほとんどは、元気いっぱいな子どもたちと公園で走り回ったり、ドッジボールで勝負をしたり、砂遊びをしたりと、身体で真正面から全力で関わりあうことだった。ただ時々、些細なことで中華系の子どもと日本人の子どもが衝突してしまい、日本語で感情の機微や、自分の考えを表現することが難しそうだ判断した場合には、僕が間に入って、伝えたい

言葉を一緒に探すといったサポートをすることはあった。

その出来事が起こったのも、きっかけは同じように些細なことだった。遊びのルールを破った、破ってないと、小学校に上がる前の日中の子どもたちが口論していた。しかし、その後、日本人の子どもが、中国人の子どもに言い放った言葉を僕は忘れることができない。

「これだから中国人は嫌いだ、中国人はみんな嘘つきなんだ」

そんなことはないし、そうやって決めつけるようなことを言っちゃダメだよ、とその場ですぐに彼の発言をたしなめた。本当は事の真相がはっきりしないうちに、どちらかの肩を持つことはあまり良くない。ふたりで話し合いをして、仲直りする過程に意味があるからだ。でも、放たれた言葉に孕まれている精神には、決して見過ごしてはいけない病理が潜んでいるように僕には思えた。彼の言葉は、単に中国人の子どもへ向けられた偏見であるだけでなく、発言した日本人の子ども自身の健全な精神をも蝕んでいるからだ。

誤解を招いてはいけないので、丁寧に書くが、僕は日本人の子どもとその決めつけの発言をここで批判したいのではない。真に劣悪なのは、まだ小学校にも上がらないほどの小さな子どもの心に、そのような差別の精神が根付きかけてしまっている、その背後にある僕たち大人が築いてきた社会の価値観に他ならない。そのことが、ただただ子どもたちに申し訳なかった。

日本人の子どもが放った言葉は、特に日中関係が冷え切っていた時期に、インターネット上での一部の発言や偏ったメディア報道などが植えつけていた根拠のない偏見やイメージと重なるところが多い。もし、いくつかの事件をあげて中国人はみな嘘つきであると結論づけるのなら、毎日のように報じられる日本人による詐欺事件はどうなってしまうのだろうか。個別的な出来事を、全体の次元にまで無批判に飛躍させるのは、あまりにも幼稚で、暴力的であるといわざるを得ない。

結局、ふたりはその後すぐに仲直りをしてまた遊び始めた。そういう素直な感性も子どもたちの美点だ。さっきのことは気にしないでいいよ、と中国人の子どもに伝えただけ、心の深いところに先の言葉が収まっていないことを願うばかりだ。

日中友好の気風は、僕がアルバイトをしていた三年前よりは遥かに高まってきたことを実感する。しかし、もし精神の地中深くに偏見が根付いていれば、それはまた差別としてすぐに地上に顔を出すことになるだろう。大人の責務はその芽を根こそぎ抜いて、どんな風雨にも簡単に揺らがない相互理解の大樹を育てていくことにある。子どもたちと一緒に遊んでいると、彼らは大人よりも地面に近いところにおいて、大地を深く観察しているという事実、よくよく気がつかされる。

## ハルビンでの過去、そしてこれから

慶應義塾大学

文学部人文社会学科 2年

清水 若葉

「日本も戦時中、同じような事をしていたのですよ」これは、アウシュヴィッツ収容所で唯一公認の日本人ガイドをされている中谷剛氏から聞いた言葉です。

私は、日本が中国に対して行った、残忍な過去を痛感した経験があります。それは、高校からの海外研修で、アウシュヴィッツ・ビルケナウの強制収容所に訪れた際のことです。ガス室や監獄を通り、現れた 1 つの建物。それは、ドイツの医師が収容者に人体実験を行っていた場所です。罪のない人々をまるで物のように扱う、人体実験の話聞き、なんて残酷な事を行っていたのだと、私はナチス政権を悲観しました。その際に中谷氏が放たれた言葉が、「日本も戦時中、同じような事をしていたのですよ」なのです。この言葉を聞き、私は日本史の授業で学んだ、七三一部隊が脳裏に浮かびました。

日本軍による人体実験の舞台は中国でした。その中で最もよく知られている七三一部隊は、石井四郎軍医中將によって作られ、中国東北部のハルビン郊外にありました。そこでは、致死的な生体実験を秘密裏に行われていたのです。施設の集まった地区は、高電圧電流が流れる有刺鉄線を張り巡らした土塀で囲まれていて、外部から完全に遮断されていました。被験者を閉じこめておくための特設の監獄が二つ設けられ、厳重な監視が行われていました。これはまさに私が見た、アウシュヴィッツ第二収容所と同じ光景です。

当時の日本人は、他の民族の人々を差別し、人道的に扱うに値しない存在なのだという偏見を生み出しました。ナチス政権がおかれたドイツにおいては、人種差別が、ユダヤ人やジプシーの人々を「人間以下の存在」とし抹殺することの背景をなしていました。同様のことが日本においても起こっていたのです。自らの民族が正しいとし、他の民族を評価してしまう自民族中心主義は、多文化への理解不足や、自国文化への行き過ぎた誇りを持つことで起こってしまいます。日本では明治以来、欧米をモデルにして近代化を進めてきたため、その文化を理想化し、アジア諸国の文化を見下す傾向が指摘されてきました。

彼らの多くは、拷問を受け、正式な裁判もないまま処刑されていました。「どうせ死ぬのであれば、国のために役立って死ぬべきだ」という論理により、人体実験や生体解剖による殺害が正当化されていました。この点においても、絶滅収容所のユダヤ人やジプシーやポーランド人を実験に「利用」したナチスと、構造的に共通しています。

日本が中国の人々に対して行った人体実験は、決して許されるものではありません。しかしこの出来事は、普通の日常に端を発した事であり、それは今日の日本でも医学部入試での女性差別など、形や程度を変えて続いているという事実で改めて気付かされました。

人種差別や女性差別の問題は、未だに残っているのです。ハルビンで行われたことは、遠いようで遠くなく、まだ何も解決していない問題であると思いました。日中の関係が社会問題となっていますが、日本は過去に中国に対して行ってきたことを認め、それに相応した態度を取る必要があると私は考えます。

人種差別は、よく他民族に対して行われます。しかし、互いの文化を理解し、認め合うことで心を通じ合わせることが出来ると思います。私は、中国語の授業を通し、中国は多民族国家であると知りました。チベット族のバター茶を味わう、タイ族の竹の家に泊まる、壮族の掛け合いの歌を聴く。このように現地の人々の文化に触れることでお互いの文化を尊敬できるようになり、友好関係が生まれると思います。

この歴史を学んで上で、今後、私達はどのような行動を取るべきであるか、自分なりの考えを見つけ出していきたいです。同じ過ちが二度と繰り返されないこと、近接した日本と中国の友好化が図られることを私は切に願っています。

## そろりそろりと参ろう

学校法人立命館

由谷 晋一

幼少の頃、我が家の近くにあった中華街の情緒が私のお気に入りだった。中華料理店の軒下に並ぶ真っ赤なランタン、店先に立つずんぐりむっくりとした可愛らしい人形、どこからともなく漂う線香の匂い。その原体験から、私は長らく中国に対して好意的なイメージを持っていた。しかし、それは今から考えると「食わず好き」だ。中国出身の方と知り合うこともなく、中国の文化を良く知っているわけではなかった。私がそろりそろりと中国に近づき始めたのは、高校で受けたある古典の授業がきっかけである。

「この声は、どなたの声ですか？」

高校生の時、漢文の授業のなかで、ある朗読のレコードを聞かせてもらった。その声は、無駄なものが削ぎ落されていてとても鋭く、それでいて中国の山林風景が眼前に現れるような表現の豊かさを備えた見事なものであった。感銘を受けた私は授業が終わると先生に駆け寄った。先生に声の主を尋ねるとそれは狂言師の野村万作さんだと教えてくれた。あんな素敵な声が私も欲しい。大学に入ったら狂言の修行をしよう、とすぐに心に決めた。以来、狂言は私のライフワークとなり、今でも舞台に立たせてもらっている。

狂言の修行を始めて数年、中国とのご縁が始まる。李さんという女性から連絡があった。

話を聞いてみると、中国出身の李さんは、東北大学に留学して、日本の古典芸能を勉強していると言う。曰く、狂言に魅せられ、狂言を紹介する本を中国で出版したいので、いくつかの質問に答えて欲しいとのことだった。すでに高名な師匠方にインタビューもされたそうで、大学生の私がお役に立てることなどあるだろうか、と思いながらもお返事をした。どうやら、名人上手の先生方だけではなく、若者の声も聞きたいということだった。そこから、李さんと新米狂言役者との文通が始まった。「能と狂言は、どう違いますか」「流派によって、狂言のセリフや演技は変わりますか」李さんから質問を受けるたびに、私は一生懸命に資料を調べ、ときに私の師匠にお尋ねしたりしてお答えした。中には「能狂言を見ているときに眠たくなるときはどうすれば良いですか」という正直すぎる質問もあった。気がつくやうに、次の質問を心待ちにしている私がいた。李さんの質問に答えるうちに、私も中国の古典芸能について興味が湧いてきた。「京劇と昆劇はどう違いますか」「現代の中国の人たちは京劇を見に行きますか」と質問を投げかけてみる。もう、中国人と日本人、教える側と教わる側という垣根は消え去り、ただ日中の古典芸能を愛する者同士が学び合っていた。

楽しい時間が過ぎるのは早かった。半年もしないうちに、李さんは帰国されることになってしまった。とうとう実際にお目にかかることのないままだったが、私は李さんの夢の実現を祈ってお別れの文章を書いた。それから5年が経ち、中国から嬉しい知らせが届いた。李さんがついに狂言についての本を出版されたのである。狂言の発生から現代の狂言まで、沢山の上演写真や資料を交えながら記した、充実した内容である。それから数年経った昨年、さらに喜ばしい知らせが届いた。中日平和友好条約締結40周年を記念し、中国北京で狂言が上演され、大盛況であったとのことである。その狂言会に出演されたのは、誰だろう野村万作先生たちであった。私を魅了したあの声が、中国の皆さんにも届いた。その観客の中には、李さんや李さんの本で狂言に興味を持って下さった方もいらっしゃるかもしれない。そう思うと、もはや運命というべきご縁に感謝の気持ちがいっぱいである。

さあ、次は私の番だ。私の夢は、中国の伝統芸能を日本で紹介することだ。食わず好きにならぬよう、実際に中国に赴いて芝居を見て、役者の方々に沢山の質問をしたい。手始めに、久しぶりに李さんに手紙を書いてみようと思う。まず、そろりそろりと参ろう。

## アフリカで身近に感じた隣人

京都大学大学院

アジア・アフリカ地域研究研究科5年

大谷 琢磨

日本と中国は、地図上では近い。長崎から上海まで700kmほどしか離れていない。しか

し、私は、中国をどことなく遠い国のようにとらえてきた。それは、日本で目にする、中国に対する否定的な意見などが影響しているのだろう。ところが、2015年以降、遠く離れたアフリカで調査をするようになったことで、中国に対する心境に変化が生じてきた。

近年、アフリカ諸国に対する中国の存在感は強くなっている。私が調査をしているウガンダでは、随所で中国関連の「モノ」を目にした。中国からアフリカ大陸には、投資や資金援助というカネ、安価な中国製品というモノ、出稼ぎ労働者というヒトの大きく分けて三つが大量に流入している。世間ではこれを、中国によるアフリカに対する「ソフトな」帝国主義だと批判する声もある。私は、ウガンダで生活する中で、この意見とは異なる考えを抱くようになった。

ウガンダに対して中国は、多額の資金援助や投資をしてきた。その結果、ウガンダの都市部では道路網が急速に整備され、多くのビルが立ち並ぶようになった。例えば、昨今のウガンダは、舗装道路の普及率の低さや交通渋滞の慢性化が問題となっていた。このような状況の中、中国系企業によって空港から首都をつなぐ直通の高速道路が建設された。首都から空港まで移動するためには、2年前までは2~3時間かかっていた。しかし、新設された高速道路のおかげで、この区間の移動が1時間以内にまで短縮され、移動が非常に快適になった。

また、中国製の製品は、今まで先進国から輸入されてきたモノよりも安価で、アフリカの消費者の手にも届きやすくなった。このおかげで、私を含めてアフリカで生活する人々の消費生活は豊かになった。ウガンダの私の友人も、みな中国製の服を着、中国製の携帯電話を使用している。私自身も滞在先では中国製の家電やマットレスを使用し、快適な調査生活をおくっている。

中国の出稼ぎ労働者は、現在ウガンダ各地でビジネスを興している。そのビジネス形態は、卸売りや中華料理レストラン、小売りまで多岐にわたる。私が調査をしている地方都市でも、2年前から中国の人が経営するスーパーができた。それまで首都で調達していたものが地方で手に入るようになるなど、生活が非常に便利になった。また、毎日のローカルフードに耐えられなくなったときには、首都の中華料理レストランにゆき、日本に近い味を思い出して、心をリフレッシュさせていた。

最後に、より身近なレベルでの体験である。ウガンダで調査していると、道端でよく「チャイニーズ」と声をかけられる。ウガンダには中国からの出稼ぎ労働者が多く、また、彼らはカンフー映画が大好きなので、通りがかった私を見て、中国の人だと思って声をかける。実際、彼らは、中国、韓国、日本の人の顔を見分けられない。「なぜそんなに君たちは顔が似ているんだ」と、疑問を投げかけられることもしばしばである。そのような折には、「中国と日本は、ウガンダとケニアのように、neighbor（隣人）だからだよ。」と、説明すると理解してくれることが多い。このような説明を何度もしていると、地図上でなんとなく

一番近い国だと認識していた中国に対して、中国が日本の本当にご近所のような感覚になり、親しみがどんどんわいてくる。

普段、日本で生活していると、中国は遠くの存在のように感じてしまう。それが、日本を一步出ると、中国と日本は人の顔が似ており、東アジアという同じ地域に位置し、文化圏も似ているということを実感する。まさに「neighbor」なのである。中国のアフリカ進出に対しては、確かに批判される点もあるだろう。しかし、困難は伴うだろうが、「neighbor」として、中国と共に、よりよい世界をつくりあげられる方策を考えることは、将来の発展や貧困削減において重要になってくるのではないかと思う。

## 私とあなたの違い

女子美術大学

芸術学部アートデザイン表現学科ファッションテキスタイル領域

勝俣 友加里

「日本語を話すことがストレス。」いつも笑顔の彼女から聞いたこの言葉は衝撃的だった。それは同じ美術大学に通う仲間と春休みを利用して、仲間の一人の故郷である四川省成都にて成都ジャイアントパンダ繁殖研究基地を訪れていた時の一コマである。可愛らしいパンダを横目に私はさりげなく中国人の友人に「日本で留学をしていて、どんな時にストレスを感じる？」と聞いてみた。するとつかさず日本語の会話がストレスだ、と答えた。それにはとても驚かされた。なぜなら、彼女は流暢に日本語を話し大学の論文も日本語で書き、コンビニエンスストアでもアルバイトを行っている。一見、不自由なく生活しているように見えるがそうではなかった。異国の地で母国語ではない現地の言葉で生活するのがどんなに大変か、それは一瞬笑顔が消えた彼女の顔が表していた。その後、私は彼女に一つの約束をした。それは彼女がストレスを感じないために、私が中国語学習に励みいつか中国語だけで会話をしようというものだ。「優しいな。」と、言い彼女の顔には笑顔が戻った。

最近日本にて、日本語で接客をする外国人店員に対する日本人客の対応の悪さが問題視されている。私はニュースやネットの記事を見るたびにどうしても友人達の顔を思い出してしまう。大学では朝から勉強をして、終業後は急いで「私バイトだから先行くね。」そう言って急ぎ足で教室を後にする彼女達に対して申し訳ない気持ちになった。

そう思ったのには大きな理由がある。ある日、中国語を勉強している私は覚えたての単語を中国人留学生の友人に聞いてもらった。しかし、発音が難しく完璧に言えないのもいつも恥ずかしくなってしまう。すると、友人が「友加里！友加里は外国人だから間違ってい

いの！何もおかしくないよ。恥ずかしくないで！」と指摘してくれた。この時私はハッとして緊張が解けた。今まで私の中にあった恥ずかしいと思う気持ちがすんなりと流れた。そして、そうだった彼女からみたら私は外国人だったと気付かされた。毎日、日本語で会話をしていると、時々彼女が中国人ということを忘れてしまう。彼女の言った外国人という言葉が、私たちは違うということを思い出させてくれた。外国人という言葉を使うと差別という意味を感じる人もいるかもしれない。国の外と内の様に分けている。しかし、中国人の友人と日本人の私が違うことは真実だ。生まれた国、習慣や文化、思想宗教など私たちの経験してきたことは変えることができない。しかし、お互いの違う点を認め合い、尊敬し合うことが理解を深めることにつながる。友人の言った外国人という言葉は、あなたは今まで日本語を話してきたから中国語ができないのは当然。どんどん間違っ練習して、と言っているように感じた。こんなにも寛容な心で私を受け止めてくれた彼女らに対して、悲しいニュースがあることは事実だ。また、別の友人は「もし私が中国人じゃなかったら、中国語は絶対勉強しない。難しいから。友加里はすごいよ。」と激励してくれる。私は中国人留学生の友人たちの言葉に毎回救われている。もし、自分の前で日本語を間違ってしまった外国人がいたら友人たちの言葉を借りて勇気づけたい。自分が勇気づけられたように。

今日、日本には様々な国の人が訪れ暮らしている。一緒に暮らしていく上で、違いや違和感を感じる場面はある。しかしそこで違いを拒絶するのではなく、なぜ違うのか疑問に思うことで文化の理解につながる。なぜ、あなたはあの時こうやったの？なぜそのように思ったの？ただ疑問として残すのではなく、聞くことが相互理解につながる。自分の当たり前が、他の人にとっては当たり前じゃなくなる。このことを考えながら生活をすれば多くの人がより分かり合えて、より良い関係が築けるだろう。

## 私を変えた誕生日パーティー

立命館宇治高等学校

IM コース

西山 佳子

731。私たち日本の高校生は、この数字の持つ意味を知らない。一方で、中国の学生は皆この数字に対して、特別な思いを持っている。

オーストラリア留学中のある日のこと、私は中国人の友人の誕生日パーティーに招待してもらった。いつものたわいのない会話中、ふと、話題の矛先は、日本と中国の歴史に向けられた。「731 部隊って知ってる？」そう聞かれた私はきょとんとするしかなかった。慣れない響きの言葉に動揺を隠せない私を見るなり、彼女らは顔に驚愕の色を浮かべた。

日本は戦時中、中国に 731 部隊を設置し、十年にもわたって化学兵器を使った人体実験を行ったという。

恐怖と衝撃、そして何よりも、中国と日本のことを何も知らずに過ごしてきた自分への羞恥心に駆り立てられながら、帰路に着いた。そしてそのまま、「ショックを受けるだろうから、見ない方がいい」と止められていた「黒い太陽 731」という映画を食いつくように観た。その映画が私に与えた衝撃は想像をはるかに超えるものだった。しばらく経っても、画面に映ったその光景が頭から離れなかった。

私は1年間の留学を終え、日本に帰国した。あの時の友人とは帰国後も連絡を取り続けていた。彼女は私と仲良くなったのをきっかけに、日本を訪れると決めたようだが、それを聞いた彼女の祖父母は日本へ赴くことに難色を示したと聞いた。同じように、私の祖父母も私が中国の話をする、話の続きを聞きたがろうとせず、中国に良いイメージを持っていないような口ぶりをする。彼らはそれぞれに自らが経験してきた辛い出来事を背負って、互いに悪いイメージを持ちながら戦後を過ごして来たのだろう。

しかし、戦争を経験していない、何も知らない私たち若い世代までもが、街ゆく中国人との関わりを避ける必要が果たしてあるだろうか。

私は留学中、中国人の友人の優しさに何度も助けられた。そして彼女と一緒にたくさんの思い出を共有した。彼女は戦時中、日本が中国にしたことを忘れてしまったから、日本人の私に親切にしてくれたのだろうか。いや違う。彼女は 731 部隊の被害者の数までもをしっかりと覚えていた。それでも毎日私に声をかけ続けてくれたのだ。

「これはただの歴史だからね。あなたのせいではないからね。」私が 731 部隊の話の初めて聞いた時、彼女の残したこのメッセージがゆっくりと、しかし力強く、私の心に届いた。彼女は、731 部隊を許してはいないかもしれない。けれど少なくとも、私個人を責めてもいないし、日本人だからといって私を色眼鏡でも見ていない。これが本来私たちのあるべき姿ではないだろうか。過去にとらわれて、中国人の温かさに触れることを避け続けていては未来は一向に変わらないだろう。一人一人が私の友人のように、「今」の中国を見て、良いところを素直に見つけることができれば、私たちの未来はきっと明るい。

メディアでは、毎日のように複雑化する日中関係が取り上げられ、報道されている。その上、「中国人はマナーが悪い」という言葉を日本でよく耳にする。実際私自身、今まで中国に対して良いイメージを持っていたという嘘になる。留学先で中国人に会うまでの私は、街中で、できるだけ中国人と関わるのを避けていた。しかし、あの誕生日パーティーの日を境に、私の夢はいつしか、日本と中国を繋ぐ仕事に就くことになっていった。日本には、昔の私みたいに本当の中国を知らない人が沢山いる。いや、彼らは知ることを避けている。そんな人々に中国の人の優しさ、文化の美しさを知ってもらいたい。そう思った

のがきっかけだった。いつの日か、今学んでいる中国語を使って日中問題を解決できる、そんな仕事に就きたい。

そう考えていた時、ふと中国人の友人の笑顔が脳裏に浮かんだ。それは、国籍などを気にせず、私に優しく話しかけてくれる彼女の姿だった。彼女は、過去をしっかりと受け止めつつも、まっすぐに未来に手を差し伸べていた。

## 学者如登山

東京学芸大学

教育学部中等教育教員養成課程書道専攻3年

高橋 杏里

2011年3月、成田山全国競書大会で入賞した私は、親善大使として一週間の中国行きの切符を手にした。それは13歳の私にとっての初めての外国、中国。初めて観る雑技団、初めての世界遺産、初めての本場の中華料理、初めて蛇口の水を飲めない経験。すべてが気持ちを高揚させ、私を新しい世界へといざなった。

私たち入賞者の訪中の目的は、中国の選抜者との「書道交流」だ。そこで私が題字にしたのは「学者如登山」。「学ぶことは山に登ることと同様で決して容易ではない」という意味がある。日本人と中国人がペアになり手伝いながらそれぞれ作品を作り上げる。先に私が筆をとった。練習通り書き上げた作品に私は満足だった。次は中国人の女の子。彼女が書き上げた瞬間、絶句だった。芸術に富んだ彼女の作品は、私の書道への向き合い方に刺激を与えた。私は行書の作品、彼女は隷書の作品を書き上げた。隷書は日本では高校から芸術書道として扱われるものであり、彼女の年齢では日本においては楷書を習うのが一般である。また、日本人が筆を少し自分の方へ倒して書く姿勢とは異なり、筆をほぼ垂直にして書く様子も印象的だった。今まで日本でしか生活したことがなく、日本の書写教育しか知らない私にとっては全く想像のつかないものだった。いつも結果として作品を、書道を考えていたが、その過程には学ぶ環境が生み出す様々な違いがあることを体感した。

これら以外にも、私は学んだことがある。自身の視野を広げることだ。書道に対する姿勢は日本と中国では大きく異なる。近くの国であり、同じ漢字を書きながらも、表現方法、学習方法は互いに異なる。自分のやり方や考え方と違う、わからないものに直面した時、おそらく人は恐怖を感じる。新しいこと、変化を求められることはいつでもこわい。だが、そのこわさに向き合い、少し足を踏み出せば新しい景色が見えてくる。そこから続く道は長く、険しく、終わりなどないかもしれない。しかし、踏み出した場所からは今までとは違うものが見えるだろう。新しいことや未知への不安、こわさは自身を成長させる原動力

となる。「上手く書けなかったらどうしよう、ペアの子の前で失敗したらどうしよう」こんな不安も、私がリアルな中国の書道を見られる機会に繋がり、視野を広げてくれた。踏み出す勇気は成長を、視野を広げる機会を私たちに与えてくれる。

そして、もうひとつ学んだこと。それは書道という共通するツールを用いてコミュニケーションが取れること。外国人と話すとき、おそらく皆緊張する。言葉の壁、話す内容の障害、多くの困難が待ち受けている。しかし、13歳の私と11歳の彼女には筆があった、墨があった、紙があった、そして笑顔があった。コミュニケーションを図ることは難しいことではない。毎日の生活にも、料理、歌、映画などコミュニケーションの種はまかれている。何気なく触れているものにもきつと、国境を超える、人と人をつなげるパワーがある。ありふれたように感じるものも、いつか輝くものになるのかもしれない。小さなことでも、自分自身を大きくしてくれる宝物になると感じる。

「学者如登山」にはこんな意味もある。「一步一步高い所に登るに従い、次第に視界が開け広々と見えるように、学べば学ぶほど視野・見識が広がっていく。」13歳の私は学ぶことは常に努力と苦勞が伴うとだけ思っていた。だか今あの時の貴重な経験を振り返ると、得られたものはそれだけではない。未知を恐れず向き合う大切さ、小さなきっかけも自分自身を大きくしてくれる可能性を持つこと、そして踏み出し学ぶことは視野を広げてくれること。13歳の私の中国訪問経験は今でも生き続け、影響を与えてくれる「学者如登山」の志を持ち、自分自身を磨き高めていきたい。

## 三毛猫の近所付き合い

東京農工大学  
工学部機械システム工学科1年  
田頭 尚大

「猫をカワイイと思うのは、中国人も同じなのですね」と、TV番組の猫特集に出演していた司会者が言っていたのを覚えている。私達家族の住むアパートのベランダにもいつの間にか住み着いてしまった三毛猫がいるが、確かにカワイイ。海の向こうの人が同じ感情を持っていると言われても当時まだ小学生であった私には想像がつかなかったが、大学の授業で『日中関係』という言葉が改めて聞いて、不意にそんなことを思い出してしまった。

十年前、隣の部屋に中国人の家族が引っ越してきた。珍しいシャム猫を連れていたので、猫好きの私は是非とも挨拶に行きたかったのだが、外国人とは無縁な田舎で育った私の両親は、彼らをひどく警戒していたようだった。当時から日中関係の悪化がTVや新聞で取り上げられていたし、思えば近所で外国人絡みの事件が起きた直後であったから、そんな態

度も無理はないと思っていたが、新たな土地で孤独に生きる彼らを見ると、幼心にも何となくもどかしかった。

そんな思いを抱きながら一か月程たったある日、ふとベランダを見ると、いつもの三毛猫が軽やかに隣のベランダへ渡っていくのが見えた。隣の部屋との壁の隙間からそっと覗いてみたところ、例のシャム猫と一緒に日向ぼっこをしているようだった。猫は目が合うと対立するという話を聞くし、言葉も違うであろう異国の猫同士がどのようにして気を許す仲になったのかは今の私にも分からないが、彼らには『文化の壁』というものはあまりないらしい。改めて観察してみると、その三毛猫は毎日シャム猫のもとへ遊びに行っているようである。のんびりと過ごす平穏な二匹の姿は、住宅地の昼間という平和なひとときを象徴しているようであった。

そんな二匹を見ていると、人間とはなんと愚かで残念な生き物なのだろうと感じる。確かに、最近話題になっている『日中関係』は猫には何ら関係のない話であるから、この行動に対して猫の優位性を主張するのは間違っているとされるかもしれない。私達人間は、つい数十年前に終わったばかりの辛く悲しい戦争の歴史や、終わることを知らない経済的・政治的対立を知りつつ今を生きている。日本のマナーをわきまえないと言って、中国人を含む外国人観光客の増加に反感を抱く日本人が多いのも事実であるし、そんなことを含めて日本人に悪いイメージを持っている中国人がいるのも事実であろう。しかし、私達はそれぞれの国のイメージを、よく知りもしない個人に押し付けすぎてしまっているのではないだろうか。少なくとも多くの日本人においては、教科書やTVから学んだ浅はかな知識を13億人以上いる中国人全員に偏見的に当てはめてしまい、近所付き合いを含む個人の友好関係に自ら支障を作っていると言わざるを得ない。私の両親もそうであろうし、そんな状況に何も出来なかった当時の私もきっとそうだったのだろう。ただ、今の私はこのような現状に疑問を抱かずにはいられない。私は、今後出会う多くの人々に対し、中国人か日本人かなどという単純な判断をせず、一人の個人として評価しあう関係を築いていきたい。『日中関係』の諸問題には解決されないことが山ほど残っているし、全てを帳消しにしてはならないことは十分に理解しているからこそ、私達は三毛猫とシャム猫のように、個人レベルで互いを見ることが求められているのではあるまいか。

ちなみに後日、私の母を呼んで二匹のことを話したところ、彼女も私に共感してくれたようで、二か月遅れではあるものの中国人の家族へ挨拶に行くことになった。意外にも彼らは日本語が達者で、日本に来たきっかけやシャム猫のことも色々話してくれた。この街が気に入ったらしく、あれからずっとこの場所に住んでいる。海を越える小さな友好関係をまた一步深めつつある私達のすぐそばでは、今日も二匹の老猫が肩を並べて眠っている。

## 中国の思いやりが日本に伝わりますように

慶應義塾大学

法学部法律学科 1年

幸田 遼

突然自分の横に座っていた彼がすくっと立ち上がった。彼の目の前に立っていたお婆さんは、少し怪訝な顔をしてから、にっこりと笑った。

「ありがとう」

これは、私が2年前に参加した学校の短期交換留学プログラム中に遭遇した1コマだ。私がホームステイとして受け入れた中国人留学生は、電車の中で優先席でないにも関わらず目の前の高齢者を見て、迷わずに立ち上がり席を譲った。言葉は通じなかったものの、彼の思いやりはお婆さんにしっかりと伝わっただろう。

他人を思いやる。日本で昔は当然とされていた考え方や行為が、今は薄れつつあるように思う。現代では、電車内での通話や駆け込み乗車は禁止事項として制度化され、思いやりが強制的に履行されるシステムが出来上がっている。一方、中国ではこれらの行為が自然になされている。

昨今優先席をめぐるトラブルが多発している。杖を持ったお年寄りが目の前にいても若者は席を譲らない、酔っ払って寝そべり優先席を占領したままそばに妊婦さんが来ても気づかない。しかし、中国ではこのようなことはあり得ない。優先席でなくとも必要な人には譲るのが当然であるし、むしろ席を譲らない方が不自然な行動とされる。どうしてこのような違いが起こるのだろうか。

これは、中国の古くからの思想である陰徳に由来する。例えば、日本では電車で席に座っている人がお年寄りや妊婦に譲ってあげることが良いとされているが、中国では少し違う。若い人や体力のある人ははじめから椅子に腰掛けず、席を必要とする人々が座れるように配慮しておくのだ。日本の譲るといふのは有徳という考え方で、あらかじめ配慮しておくのが陰徳という中国で古くから理想的とされる考え方だ。この思想が日本にも普及すれば、先ほどの車内トラブルは容易に解決されるのではないだろうか。

また、私は障がい者のためのNPO法人に所属して障がい者支援活動をしているのだが、そこには中国人の留学生や日本語教師をしている中国人も所属し、一緒に活動している。ちなみに、この団体には、中国人以外の在日外国人は参加していない。彼らはこの活動に共感し、自発的にボランティアを買って出てくれているのだ。この点からもわかるように、中国人は誰かに役立ちたいという想いが根本的に強い。

近年の中国の経済発展は著しく、IT関連では世界に先駆けての製品・サービスを提供し

ている。その背後にあるものは、言うまでもなく中国におけるテクノロジーの、目を見張るような進歩である。それだけでなく、この急速な経済成長には別の要因があるように感じられる。おそらくそれは、思いやりの心である。中国人は他人を気遣うという考え方が生まれつき身につけているため、そこにフォーカスして研究を進めることで、中国はこれほどまでに豊かで便利な暮らしを手に入れることができたのではないだろうか。

そう考えたのは、先ほどのプログラムで初めて訪中した際の実体験による。北京では黄色や赤の自転車が至る所で見られた。これはなんなのかと尋ねてみると、シェア自転車が日常化しており、どこに行くにも自転車が利用されているとの答えが返ってきた。日本でもシェア自転車という仕組み自体はあるが、中国のような規模には発展していない。これは、中国人が他人を無条件に信頼して思いやりができるからこそ確立したシステムだと感じた。

中国では人を思いやるのは当たり前。昔は日本もそうであったはずなのに、いつの間にかその精神は失われてしまった。昨今自己責任を当然視する風潮が強まっているが、果たしてそれは正しいのだろうか。自己責任をという言葉強調しすぎて、却って他人を切り捨てて否定する考え方が強くなってきているとも捉えられる。我々日本人は中国の思想を見習い、いつかの彼のように、他人を思いやるのが当然であるような振る舞いを今一度取り戻す必要がある。中国の思いやりが日本に伝わりますように。

# 「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2020」

## ★入賞

### 中国とわたしの複雑だけど単純な関係

聖心女子大学  
現代教養学部 1年  
石川 春香

13歳の私には秘密があった。「中国語が話せる」ということだ。

私は、小学校4年生から6年生にかけて父の仕事の関係で中国の広東省広州市に住んでいた。週に2回の中国語のレッスンは、毎日少しずつ話せるようになることが楽しく、大好きだった。習い事の先生。「島」をめぐる問題における抗議デモが行われたときに私たち日本人を守ってくれた警備員さん、領事館の方々。多くの中国人に支えてもらって、私たち家族は何不自由ない生活を送ることができていた。

中国を名残惜しく思いつつ、日本に帰国してからだ。私が隠し始めたのは。

日本に帰ると、テレビでは「爆買い中国人」「ニセモノ王国」など、人々に中国の印象を悪く持たせるような番組が毎日放送されていた。現在でもそれは続いており、そのような放送を行うコーナーまで出てきている。私が帰国したのは、中学1年生の13歳。テレビの放送を鵜呑みにしてしまう年齢だった。そんなこともあり、周りの子たちは、私が中国帰りだと知ると、私のことを「中国人」と陰で呼ぶようになった。ある時、「中国語を話してみてよ」と言われたことがある。私は、得意になって自己紹介を中国語でした。すると、私が想像した反応とは真逆の言葉が返ってきた。

「やっぱり中国人じゃん」

その時から私は中国語が話せないフリをするようになった。そして、忘れようとした。

それから、何年かして広州で一緒に過ごした日本人の友達も同じような経験をしていたことを知った。それも色々な地域で何人もの子が。

今、グローバル化と言われ続けている中でなぜ日本人は中国に歩み寄ろうとしないのだろうか。子供だからテレビを鵜呑みにしてしまう、そんなことがこれからの世界で通用す

ののだろうか。いや、大人でさえもメディアからの情報を真に受けて、間違った知識の中で生活している。もっと私たち自身がその国について調べ、考え、自分の目で確かめていくことが必要なのではないだろうか。

ここで私は自分自身を振り返った。私はなぜ中国人と言われて傷ついたのでだろうか。私も周りの子と一緒にではないか。中国人と言われて、私が大好きだった人たちを思い起こしていけば何も傷つきはしなかったはずである。私もメディアからの情報に浸されていたのだ。私はまだ多くのことを知らない。だから、これからは中国語を隠したりせず、もっと話せるようになって中国について学んで行きたい。そして、自らも出会いや経験を何も知らない日本人に発信して、一人でも多くの人がメディアだけでない中国について考えられる機会を提供したい。これからは私自身が日本と中国の架け橋になれるように努力しようと思う。

私からの1つ目の発信。あなたは、本当の中国の姿を知っていますか？

## 祖母の手紙

千葉敬愛高等学校3年

柳田 華佳

小さい頃、共働きで家にいない両親の代わりにずっと一緒にいてくれたのは祖母だった。祖母は中国出身で日本人の祖父と結婚し、母が生まれそしてクォーターである私が生まれた。

私は生まれながらに心臓が弱く、激しい運動や遠出は医者からとめられていて、行けるのは近くの公園、遊べるのはブランコや滑り台程度、祖母はそんな私をととても優しく大切にしてくれた。

祖母が、私にずっと言っていた言葉は「いつか一緒に中国へ行こうね」だった。

いつも「約束」と言って指切りをしていた。祖母は中国のいいところや食べさせたい料理見せたい風景の事をずっと話してくれていた。祖母の話す中国がとても楽しみだった。

祖母は、私が五歳のころに亡くなっている。結局、私は祖母と中国へ行く事は叶わなかった。

私は日本で過ごし続けて高校生という歳になっていた。東京オリンピックが決まり、日本を訪れる中国人も増えてきて、私は疎遠していた中国にまた興味を持ち始めた。

私が住んでいる街は有名なお寺があり、観光客が多く、駅でよく中国人に話しかけられることがある。中国語で話しかけられても分からず、もどかしい思いを何度もしてきた。きっとオリンピックの年になったら、もっと話しかけられるんだろう、そう思った私は少しでも中国語で会話したいと考え両親に「中国語を学びたい」と相談した。両親は、快く賛成してくれた。

手紙の事を知ったのはついこの間の事だった。母が少し大きな箱を取り出してリビングの机の上に広げて、その箱から一通の手紙を取り出した。その手紙は中国語で書かれていた。私とその文字を読もうとする前に母はその手紙を箱の中に戻してしまった。「これはお婆ちゃんが書いた手紙だよ、貴方に書いた手紙。貴方がちゃんと中国語読めるようになって、中国に行っても困らなくなったら読ませてあげる、今はまだ早いわよ」と母はそれだけ言って夕飯の支度に取りかかった。

驚いた。祖母が私に手紙を残してくれているなんて知らなかった。もし私は中国に興味を持たず、中国語を学びたいと思わなかったら、きっと母は手紙を見せってくれなかったでしょう。両親も祖母も私が自分で道を選ぶのを待っていてくれた。両親と相談して来年中国の大学に進学することを決めた。

私は、まだ祖母の手紙を読めていない。もしかしたらその手紙を読むことが出来るのはまだ先かもしれない。それでも私は一歩ずつ中国に関わり、中国語を学び、自分の世界を広げたいと思う。

今日も手紙の内容が何なのか考えながら、私は中国について学んでいる。

## タクシーでの忘れ物

和歌山大学  
経済学部経済学科 4年  
松田 実久

昨年 5 月のちょうどこの時期、これから夏が訪れようとしていた時、私は自分の中の中国へ対するイメージが 180 度異なることとなる出来事を体験した。

私が大学 3 年の頃、私の大親友が中国の上海に留学しており、彼女に会いに行くため、私は中国へと向かった。その時の私の中国に対するイメージといえば、日本のテレビによるマスコミの報道する偏った政治的なものや、中国人観光客による所謂“爆買い”のイメ

ージであった。特に政治的な部分に関しては「島」をめぐる問題はもちろん、習近平国家主席による反腐敗キャンペーンによる大物の粛清、更にはインターネット規制、様々な点において私はなんとなく怖い印象を抱いていた。特に「島」をめぐる問題において、日本のメディアの報道により、中国の方達は日本人が嫌いである、という印象を持っていた。そんなイメージの中での訪中は正直あまり気分の乗るものではなく、友達に会うために仕方なく行く、というものであった。上海に着くと、友達が空港まで迎えに来てくれたため、私たちはタクシーに乗り、ホテルに向かった。今回の旅行は一泊二日というタイトな日程であったため、あまり時間はなく、夜ご飯に大好きなチャーハンや小籠包などを食べ、その後に上海の有名な夜景を見て、私たちはホテルに戻り、二日目に備え、早めに就寝した。次の日、行きたい場所があり、ホテルの方に頼んでタクシーを手配してもらった。到着したタクシーに乗り込み、タクシーのトランクにスーツケースを入れ、ホテルの方に別れの挨拶をし、私たちは目的地に向かった。目的地に到着し、タクシーから降り、少し経ってから、私はあることに気がついた。そして思わず叫んだ。「スーツケースがない!!!」私たちは慌てて、その乗ってきたタクシーを探したが十数分経っていたのでもちろんいるはずもなく、途方にくれていた。私の友人も留学に来たばかりでその頃はまだ中国語がほとんどできず、どうにもできなかった。その荷物の中には大事なものがたくさん入っていたが、もう諦めるしかないのか、そう思っていた時、私たちのことを近くで見ていた方が声をかけてきてくれた。中国語だったので私にはよくわからなかったが友人が時折英語を交えながら私たちの今の状況をその方に伝えてくれた。すると、その方がレシートはあるか、と聞いてきたのでレシートを渡した。レシートに電話番号がのっていたようで、タクシー会社に電話をしてくれた。そしてタクシー運転手が私たちがかまっていたホテルに荷物を届けてくれるというので、助けていただいたその方に心からの感謝を述べた。するとその方が、こう言った。「僕も昔日本に旅行に行った時、とても困ったことがあったが日本人にとっても親切にしてもらった。いつか恩返しをしたいと思います」と。私はなんだか胸が熱くなった。私は今までなんて偏った考え方を生きてきたのだろうと思った。今まで、私は中国人を“中国人”と一つにまとめて考えていた。中国人はこうだ、と決めつけてもいた。当たり前なことだが、世界にはいろいろの人がいて、皆それぞれ、いろいろな考え方を持っている。一人として同じ人間はいない。私が何も知らずにただの偏見で良い感情を抱いていなかった“中国人”に親切にした“日本人”がいて、その人のおかげで私は今この恩返しをうけている。このような人と人が心を通じあわせる場合において中国人、日本人というカテゴライズは全く無意味なものであると私はその時深く感じた。ただただ、人と人なのである。その後ホテルに戻ると、すでにタクシーの方が荷物をもってきてくれていて、私達は直接タクシーの方にお礼を言うことができなかった。

私は帰国し、困っている人を見たら日本人でも外国人でも、声をかけるようになった。私が受けた恩を返すためである。私はタクシーにスーツケースを忘れたが、却ってきたスーツケースの代わりにあるものを置いてきた。偏見という名のものを。

## 「垣根」を笑う

日本大学

法学部政治経済学科3年

徳永 良行

私たちは、誰かが作った隔たりを何の疑いもなく従っている。中国と日本がそうである。私たちが互いに避けあう必要がどこにあるのだろうか。ちょっとした勇気と、「垣根」を飛び越える意志があれば、盲従から目を覚まし、互いを認めあうことができるはずだ。「垣根」など、汚れたほこりのようなものだ。笑い飛ばせば、それでちょうどいいのだ。そんな思いを、私は、ある中国人から学んだ。

4年前、私の住む家の近所に中国人一家が越してきた。彼らは日本語があまり得意ではなかったが、しばらくして中華料理店を開き始めた。近隣の人々も、最初は親しくしてうまく関係を築けていけるかのように思えた。だが、微妙な生活習慣の違いがほつれになり、トラブルを解消しようにも言葉による意思疎通が困難なため、近隣の人たちはその一家へ「垣根」を設けてしまった。

見えなくてもたしかにある、理解できない恐怖、不愉快、いら立ちがその「垣根」を構成していた。私は人々が作ったその垣根を、誰もがそうしてる、みんながそう考えているならそうに違いない、などと、疑いもなく当たり前のようにその垣根の前に盲従し彼らから距離を取っていた。

けれど、私は幸運だった。今でも忘れない、あの日、私は家に入る鍵を外で落としてしまい、父母が帰るのをぼんやり待っていた。すると、若い青年が私の前を横切りチラリとこちらを見てすぐに歩いて行った。その時、私はすぐに例の中国人だと思った。それからしばらくすると、また人がやってきた。さっきの中国人青年だった。今度は先ほどと打って変わって、なにか心配そうにこちらを見ていた。すると、片言の日本語でこうやってきた。「ダイジョウブですか？」

後で分かったが、どうやら彼は私在家から追い出されていると思ったらしい。ただ、その時の私は驚きよりも、心配されたことがとても嬉しかった。「ありがとうございます」私はそう返した。

しばらくそのまま二人で喋った。片言の日本語で聞き慣れないことが多かったが、相手がどれほど誠実に私の言葉を理解しようと努めているか。その姿勢はかたや垣根を作る私たちとはよほど対照的だった。「じゃあ、ゴハン食べていかない？空いたでしょ、オナカ」彼は優しい笑顔で誘ってくれた。躊躇う理由もはや何処にもなかった。あとから親に何と言われようとも関係なかった。「うん」私も、笑顔でそう返した。

中華料理店で、その青年のお父さんに麻婆豆腐をご馳走してもらった。今でも、その味

を忘れない。そこで、いろいろなことを教わった。彼らが四川省から越してきたこと、青年は日本語学校に通っていること、今度四人目の兄妹ができるということ。青年のお父さんは私にこう言った。「我が家では日本語ができるのは私しかいないから、近隣の人に迷惑をかけっぱなしでね。でも、こうしてご飯を食べに来てくれる子がいて、ここは本当に親切な人がおおいね」

私は褒められてうれしかった半面、恥ずかしく思った。迷惑とは何なのだろう。ただ理解しようとしないうちのこちらのことを、「親切な人」なんて、考えもしなかった。なんだか、今まで作ってきた「垣根」が私には馬鹿らしくなってきた。

それから、私と青年は頻繁に会うようになった。いろんな話で笑いあったり、悲しんだりもした。今でもその関係は続いている。近所の中で、私ひとりだけしか「垣根」を飛び越えられてはいない。だが、「垣根」とは私たちが思う以上に小さいもので、笑い合えば飛んで行ってしまうものだ。日本と中国、政治・歴史を辿ればまだ難しいかもしれない。けれども、いま一人ひとりが交流し理解しあえば、互いに持つ不信感を克服することも出来るはずだ。それを、私はあの中国人に学んだのだ。

## 日中交流で得た宝物

神戸市外国語大学  
外国語学部 中国学科  
北村 美月

「本当に美月ちゃんありがとう。この活動は美月ちゃんが帰国後も続けていくね。」

この言葉がどんなに嬉しかったか。自分のやってきたことは、自己満足ではなかったのだと実感した瞬間だった。

わたしと中国の最初の出会いは、大学だった。将来的に役に立つと感じ、中国学科を選んだことが始まりだ。いや、正確に言うとまだ出会ったとはいえない。というのも、最初のころは、中国語を習得することに重きを置き、中国人の友達も全くおらず、勉強するのも昔ながらの中国文化や歴史、堅苦しい政治の仕組みばかりで、今の中国を知ることも、そして知ろうともしていなかった。

中国について勉強しているのに、中国の実態、そして肝心の中国人との交流がないことに違和感を思い、私は一昨年、約1年間の留学を決意した。

留学を決めたときは、日本人差別を受けるだろうか、環境衛生、治安は大丈夫だろうか、怖くて不安で仕方がなかった。しかし蓋を開けてみるとどうだろう。歴史の考え方は人それぞれあれど、周りの中国人は親切すぎるほど親切で感動することばかりだった。また上海をはじめ、日本よりはるかに発展した IT 社会、治安も北は、ハルビン、南は、雲南まで旅したが、どこもそこまで悪くない。

特にうれしいことは、日本人と仲良くなりたいたいという姿勢を見せてくれる同年代の中国人が多いことだった。しかし残念なことに、日本人側は、中国にいる日本人であるにもかかわらず、中国人との交流に積極的な人は少なかった。理由は、自分の語学力に自信がない、もしくは中国に対する悪いイメージが抜けていないことにあった。

中国人と実際交流してから言ってくれ。私は切実にそう思った。

しかし留学先の上海は、日中交流団体はあれど有料のところばかり、または活動場所が遠いなど、もともと交流に意欲にある人しか集まらないものばかりであった。大事なものは、まだ日中交流を経験していない、食わず嫌いの人をなくすことだと私は感じた。

そこで交流初心者向けの無料日中交流団体を立ち上げることを決意した。内容は言語が分からなくても楽しめるゲーム交流イベントを目標に団体を作った。最初は、異国でツテもなく、現地学生の授業に飛び込んだり、様々なイベントに参加し仲間集めを始めた。すると、協力的な中国人はすぐ見つかった。

正直最初は、イベントに全然人も集まらず、運営するために必要な資金や、中国メンバーとの考え方のギャップ等、うまくいかないことばかりだった。特にお互いの文化背景から、私の当たり前が彼女達の当たり前ではないことを何度も痛感した。

しかし、彼女達の思考力や行動力のスピード感に、とてもいい刺激を受け、どうしたら、お互いのよさをいかせるかについて中国スタッフと話し合い、日本では味わえなかった活気溢れる活動ができたことは今でも忘れない。

何度も試行錯誤を重ね、交流会も安定し始めた頃、私はある思いをもつようになった。

それは、自分の帰国後も活動してもらいたいという思いだ。

そのためには、周りから求められる団体にしなければと、参加者の満足度を高めようと毎イベント後にアンケートと外部のアドバイスをもらい、常に更にいいイベントになるよう工夫を続けた。その結果、最後には参加者 80 人を超えるイベントを開催することができ、冒頭で述べたように、今なお現地学生が活動を引き継いでくれている。

私は、日中友好の輪という、思いがけないプレゼントをそこでもらった。

そして私は現在、中国ともつながりの深いグローバル日系企業で働くことを決めた。今度はビジネスというフィールドにおいても日中の輪を咲かせたいという夢を胸に、学生最後の一年、日中友好活動に取り組もうと思う。

## フィルター越しの世界

東京学芸大学附属国際中等教育学校

6年生(高校3年生)

大島 綾乃

「一つの出来事でも国によって様々な解釈をして国民に伝えようとしている。」「どんな情報が本当に“信頼できる”情報なの？」日本・中国・香港の歴史教科書を読み比べて、一番始めに浮かんだ疑問だった。そしてその疑問は今も胸の奥にあり続けている。日本と中国は長い歴史の中で様々な関係を繰り返し広げてきた。決して友好的なものだけでない。負の側面が現在の日中関係においても影を落としているように感じる。

昨夏、日本、中国大陸部・香港の高校生が香港に集まって日中問題を話し合うサマープログラムに応募し、選考を経て参加することができた。チームに分かれて歴史問題についての議論、現在の日中問題に関する両国メディアの記事の比較調査、政策立案や模擬外交など、さまざまなアクティビティを経験した。応募したきっかけは、中国語を学校で履修していたことから日中問題に興味があったことと、新しい環境に飛び込みチャレンジしてみたかったという単純なものだったが、プログラムの一週間は衝撃の連続だった。たとえば、南京大虐殺について日本、中国大陸部・香港の歴史の教科書を読み比べるセッション。日本の教科書には、本文の脇の注釈に数文書かれてあっただけなのに対して、中国の教科書には、数枚の写真のもと1ページにかけて日本が中国に対して行った虐殺が細かく書かれていた。虐殺の推定人数も日本側と中国側では大きく異なる。単なるコミュニケーション不足には留まらない、偏見や情報操作について改めて考えさせられた。

会議の中で最も印象深かったのは、Peace Initiative という、ショッピングセンターや駅で香港の一般の人々に「平和」を発信する活動だ。プログラム参加者が協力して、様々な言語で「平和」と書いたポスターを作り、それを掲げて平和啓発への署名を訴えた。多くの人は訝しげに私たちの様子を眺め去っていった中で、あるお年寄りの方が私の前に静かに立ち、敬礼なされたのだ。日中戦争と関係があるのではないかと感じた。70年以上がたった現在でも私のことを「一人の高校生」でなく「あの時の日本人の子孫」として認識している事実を痛感し、悲しい気持ちになった。一方で、同世代の高校生を中心に、「加油！」

や「ありがとう！」といった声をもらうことができ、小さな集団の小さな活動が平和の輪を広げていくことを実感した。

プログラムで一緒になった中国人のうち、四川から参加していた同い年の Celine とは現在も定期的に連絡を取り合っている。彼女は、父親が日本に対し強い偏見を持っていて、幼いときから日本の悪い印象や側面を教え続けられてきたそう。しかし彼女は日本のアニメをよく見ているといい、私が知らなかった日本のアニメまで紹介してくれた。日中問題だけでなく、お互いの高校生活や将来の夢、自分の住んでいる地域の特徴など、夜遅くまでたくさんのお話を語り合った。たとえ周囲に偏見を持っている人がいても、Celine との関係のように共通の価値観を持ち未来を語ることはできる。この経験は、大いに私を勇気づけてくれる。

日中関係は今後若い世代が中心となって解決の道を図るべきだと感じている。一方で、教科書の記述に象徴されるように、ある一つの物事をとっても両国の国民の見方には偏りがある。そして、ともするとメディアがその偏りを助長するため、両国の世論が対立してしまうことも起こりうる。私はこうした安易な偏見に流されない社会にしたい。批判的に、そして柔軟に社会で起こっている物事を見ようと思う。“平和”を実現することは決して容易なことではない。多様な人々が多様な価値観のもと生活しているからだ。会議に参加することで、他者のことを〇〇人というフィルターのもとで見ていたことに気づかされた。「『〇〇人だから』というレッテルを貼るのはやめにしよう。」私はこの言葉をできるだけ多くの人々に訴えたい。

## 僕が考えるノーマライゼーション

関東国際高等学校

外国語科 中国語コース

井内 英人

「ノーマライゼーション」と聞いて、どこの国の話を想像するだろうか。現在、広く知られているノーマライゼーションとは、僕が調べたところによると、北欧とアメリカで生じた考え方が徐々にまとまっていったもので、障害者自身よりもむしろ障害者の置かれている環境に焦点をあてた考え方のようなのだ。

そして、僕が伝えたいことは、欧米主流と思われがちなこのノーマライゼーションの考え方が、実は、中国に広く根差しているのではないかということだ。

僕は、父の仕事の都合で小学校から中学校にかけての三年間、家族と共に上海で過ごした。そして、僕には身体障害があるのだが、中国語しか通じない現地校に通った。それま

で中国に縁のなかった僕は、中国語が全くわからず、先生の話も理解できなかったが、毎日ワクワク楽しい日々だった。何より、先生方やクラスの皆がとても親切だった。また、日本のアニメが大人気で、皆、日本人の僕よりも詳しく、日本のポップカルチャーは、世界に通用するコミュニケーションツールなのだと実感した。このように、僕は中国人の中で、ちょっと珍しい日本人として楽しい学校生活を送った。と、今まではそう思っていた。しかし、僕と先生方や友人達との関係は、決して物珍しさだけでないと確信できる、そんな話を、先日、父の友人から聞いた。

父の友人というのは、上海に住んでいたころから常々「英人に会わせたい人がいる」と父が言っていた方で、四年越しに実現した対面だった。父と仕事上関係のあった方で、中国人でありながら驚くほど流暢な日本語を話した。日本語は単身で日本に留学して習得し、その後、日本の会社に就職し、今では常に高い業績をあげ、誰もが一目置く存在だという。がっちりとした体つきは少し怖そうにも見えたが、僕を見る眼差しはとても優しくかった。その方と僕には、身体障害者という共通点があった。だからという訳ではないが、その方がこれまで経験してきた出来事はどれも息を呑むような話ばかりで、夢中になって聞いた。日本に留学して三日目に降った大雪があまりに大変で絶望した話、学校の成績が一番になった時の約束で買ってもらった自転車に三年かけて乗れるようになったこと、語学の習得には環境が大切ということなど、どれも興味深かった。障害があっても自分が成し遂げたいと思うことはとことんやり抜く、時には時間がかかるかもしれないがやっちはいけない事など無い、「限界を作るな」ということを教えてくれた。今の僕には、色々つらいことがあるけれど、もっと自由にチャレンジしてもいいのではないかという話を聞いて勇気が湧いてきた。そして「留学していた当時、役所から障害者スポーツセンターを紹介されて行ってみたけど、障害者が身体を動かしていたけど…」と話が続いた。「中国には障害者向けの立派な施設はないけど、誰でも普通に街中で物乞いに施しをするでしょ。そんな人も受け入れる中国人の方が寛容かもしれないね」と。その話を聞いて僕はハッとしました。何を思い出したかという、上海で通う学校がなかった僕に、障害のことを問うことなく「明日からでもいらっしゃい」と言ってくださった王校長先生、困っていると知らず知らずのうちに集まってあれこれ助けてくれる友人達、日本では座席を譲られたことなどなかったが、上海では大声をかけられ全力で席を譲られたことなどだ。このような僕が上海で体験した出来事は、偶然でも興味本位でもなく、される側もする側もごく自然体である。このことこそが、中国に根差したノーマライゼーションの本質ではないかと気付いた。

僕の勝手な想像だが、父の友人のように、障害があっても限界という壁を作ることなく、努力をして成し遂げる強靱な精神が生まれるのも、中国だからなのかもしれない。僕に色々な気付きをくれた父の友人に感謝したい。

## 僕の願い

東京学芸大附属国際高等学校 1年

佐藤 龍馨

純粋な日本人である僕は、親の仕事の都合で物心ついた時から上海で、中国人のおじいちゃんおばあちゃんに育てられました。

母はシングルマザーで、まだ赤ちゃんであった僕を連れて中国に留学し、その留学先であった上海交通大学の留学生寮の上の階に住んでいた教師のお母さんが、昼間に時間があり母の勉強中に僕を預かってくれたのが縁で、その後中国で就職し忙しく働き始めた母のかわりにずっと夫婦で僕を育ててくれたのです。

今思うと、子連れで留学する学生を寮に入れてくれたり、言葉もまだあまり通じない日本人の子供である僕を本当に大事に育ててくれたり、中国は本当に懐が広い国だと思います。中国のおじいちゃんおばあちゃんは、喘息があった僕が発作のたびに寝ないで看病してくれ、勉強をみてくれ、食事では一番おいしい部分を僕にくれて、中学入学のタイミングで母と日本に帰国した僕に会うためにわざわざ自分たちでビザを取り飛行機を取って日本に来てくれました。中国のおじいちゃんおばあちゃんは僕の大事な家族です。

でも僕は帰国してから、日本のテレビでは中国のことがあまり良いイメージで報道されていないことに気が付きました。日本で違反をした人、マナーが悪い部分がクローズアップされて、僕が中国で育ったことを知る人に、中国人なんて最悪だぞと言われたこともありました。家族を悪く言われたのと同じで思わず涙が出た出来事です。そして同時に僕が思い出したのは、中国にいた時に「島」の件で大きな抗議デモが起こったことや、中国のテレビドラマでもよく日本兵が悪役で出てくることでした。

同じ一つの事実や歴史でも、見る側の立ち位置が違えば、見える形も違ってくるのだなということを僕は生まれて初めて本当に実感しました。でも自分と立ち位置が違い、相手と見える形が違って、こういう角度から見ればこういう見え方があるのだということを相手の立場にたってお互い理解することができれば、お互いを悪く言う悪いループを断ち切れるのではないかと思います。

日本に帰国して初めて日本の学校に通った当初は掃除のやり方一つについても中国との違いがあり、いくつもの場面でギャップを感じましたが、今改めて感じるのは、それはどちらが良いか悪いかではなく、それぞれに良い面と悪い面があるということです。

僕は両方の国で育ったので、なぜ中国人が、日本人がそういう行動をするのか、なぜそう考えるのか、それぞれを自然と理解することができます。結局はどちらの国の人間が悪いか良いかではなくて、お互いの社会事情や文化、そして生活習慣が違うだけなのです。

同じ日本人同士の友達でも、お互いの育った環境や考え方の違い、個人的な嗜好の違いで分かり合えなかったり、すれ違ってしまったりすることがあります。僕も帰国してから、最初は部活動の上下関係など日本独特の文化に面喰いクラスメイトと溝を感じたこともありました。でもお互いの習慣や背景を知り、それを尊重して理解しあおうという気持ちがあればその溝はすぐに乗り越えて、仲良くなれるということも知りました。一番怖いのは相手のことを知らないまま勝手にイメージだけで相手を決めつけることだと思います。その先には何も生まれません。

中国のおじいちゃんおばあちゃんと僕は、血はつながっていませんし、国も違いますが、何よりも強い絆でつながっています。僕にとっては日本も中国も大事な家族がいる故郷です。中国からの帰国子女である僕が溝を乗り越えてクラスメイトと仲良くなったように、中国と日本の間の溝が埋まってゆければと願いをこめてこの作文を書きました。

## 火鍋との出会い

京都大学大学院

農学研究科応用生命科学専攻修士1年

出石 佑樹

「やばっ！ 辛いわー。でも、箸が止まらんわ。」今日も、楽しそうな声が研究室から漏れている。

普段は皆、真面目に植物などを研究しているが、時々打ち上げでやるイベントがある。それは火鍋パーティー。皆、ヒーヒー言いながらも、どんどん口に運んでいく。たまには、花椒のせいかな、お腹が痛くなったりと、絶えず笑い声が絶えない、最高のひと時である。そんな私もこの時ばかりは研究室の別の顔として、研究で来ている中国人留学生の見習い料理人となり、火鍋の作り方を教えてもらっている。研究のプロトコルファイルの中には、一つだけ、見慣れない文字で「火鍋」というプロトコルが存在する。こんな賑やかな研究室になったのも、中国からの留学生李君が来てからだ。彼は、グローバルレベルでの研究をしたくて、私の研究室に入ってきた。彼とは皆すぐに仲良くなり、楽しい学生生活が始まった。

しかし、そんな楽しい学生生活を過ごすうちに、一つの疑問点がふっと浮かんだ。それは、「なぜ、そんなにやる気が高いのか？」一般的な日本人であれば大学生になり遊び、皆がやるから仕方なく就活したり、卒業論文を執筆する。自分もそんな大多数のうちの一人であった。しかし彼は、論文を進んで読み、先生方とディスカッションし、自分の意思を

はっきりと示していた。それも自分の自己実現のために。彼は、「いつか中国に帰って一大ビジネスを手掛けたり、世界初の研究をできる研究者になりたい」と言っていた。そういった彼の言葉には嘘偽りなどなく、率直な気持ちであった。また、「周りの友達もレベルの高い友達ばかりで自分も負けていけない」と口走っていた。その時、ふと思ったことがある。それは、中国とはいったいどういった国なのだろうか。自分の目で確かめ、現地の学生に刺激を受けて自分自身が成長できるのではないかと思った。そして、現地流の火鍋の調理の仕方の練習も含めて、習いたくなった。

現在、多くの人たちが「中国」という国に偏見を抱いている。レストランでの接客などで、少しミスただけで、「あれだから中国の人は…」と口にしたりしている。一方で、自分が彼らに向かって、「いや、日本人でもミスするでしょ!」と面を向かって言えず、いつも心の中で唱えてしまう自分に嫌味を覚えてしまう。そう、自分に足りないのは、ほんの少しの「ユウキ」なのだ。親から名前として授けてもらった「佑樹(ユウキ)」が必要なのだ。

ただ、今ならしっかりとこれだけは言える。「どんな人でもミスはするし、それは日本人でも中国人でも共通だ。ただ単に、一回の出来事で中国のことをわかったふりをして言わないでほしい」と。自分も、実際に中国を訪問したことはない。だから、中国の人々の真の国民性はわからない。ただ、日本国内でいろいろな中国の友達を作ってきた中で感じたことは、皆同じ人間で、優しさや幸せ、悲しい気持ちはどこの国の人でも共通なのだ。李君に限らず、私の中国人の友達は皆優しく、意欲的だった。私はそういったものも含めて、中国とはどのような国なのかを実際に見て皆に伝えたいと思う。

このように、中国には、まだ見ぬ魅力が多く存在する。そういった魅力をしっかりとかみ取って、自分の経験に役立てたいと強く感じた。というのも、来年から私は社会人になる。これからは大変なことやしんどいことも多くある。そんな中で、李君のようなしっかりと目標を持った人物に会い、自分の生きる軸を確立したいと思った。自分が中国に行く意義はそこにあるのだと強く感じた。自分は日本のみならず世界中で活躍できるような人材になりたい。そういった人材になるためにも、一度中国を訪れて、現地の雰囲気や環境に影響を受けて、日本の研究力や教育を変革し続ける人材になりたいと思った。また、これが私に与えられた責務であると最近強く感じている。

## 小さな架け橋と深い絆

郁文館夢学園

高校2年

張替 千翔

僕が中国に初めて興味を抱いたのは、卓球を通じた体験だった。中学生のときに卓球部に入部した僕は自然と卓球の世界大会などを通じて、中国の圧倒的な強さを目の当たりにした。僕が見た国際大会の優勝者はほとんどが中国選手で、日本の選手はまるで歯が立たなかった。そうしたなかで、中国の指導者が日本に来て若手の有望選手を指導したり、日本の有名選手だった福原愛選手が中国に渡り、卓球リーグに参加して腕を磨いた話も聞いた。これらが、僕が身近に聞いたはじめての国際スポーツ交流だった。

僕が高校に入学するのと同時に、父が中国・広州に仕事で単身赴任した。冬休みに家族で父を訪ねて広州に行った。僕は中国に行ったら、ぜひ地元の人たちと卓球をやってみようと思っていた。昔見たテレビ番組で、街中に卓球台が置いてあり、老若男女が卓球を楽しんでいる姿を見たことがあったからだ。その輪の中に入りたいと思った。

父に頼んで卓球ができる場所を調べてもらおうと、広州市の中心部に立派な卓球用の体育館があることがわかった。体育中心というスポーツ関係の施設がすべて集まっている広大な地域の中に、卓球の体育館があった。驚いたのは卓球体育館の廻りの屋外に、卓球台が何十台も置いてあり、そこに、昔テレビで見たような風景が、さまざまな人が卓球を楽しむ姿があったことだ。

卓球体育館の中はとても整った設備の中で、熱気にあふれていた。大きな五星紅旗の元で、子どもから大人までとても高いレベルの練習をしていた。父の友人の中国人の方に頼み受付の方と調整していただき、その場で練習できることになった。その練習場で一番若いコーチが相手をしてくれることになった。その日はあつという間の4時間の練習を行ったのだが、結局広州に滞在した4日間の毎日をそこで過ごすことになった。コーチの方が本当に親身に、言葉もあまり通じない中で、身振り手振りで卓球を指導してくれた。また父の中国の友人は何度も来てくれ、通訳をしてくれたりカウントをとるなど、長い時間ずっと立ったまま側で助けてくれた。そして、周りの方々もなにかと手助けをしてくれた。中国の人は、仲良くなると本当に親切で、日本人以上の「おもてなし」精神の持ち主ではないか、と感じた。またこうした交流も個人レベルの国際スポーツ交流ではないか、と思った。

僕は中国に行くまで中国の人が少し怖かった。なぜなら大きな声で話すことや、日本人にいい印象を持っていないので、僕は嫌われて嫌がらせをされるかもしれないと勝手に悪い印象を持っていた。しかし、実際は中国の人々は本当に親切だった。この交流で僕自身も中国のファンになったし、私を教えてくれたコーチも、その周りの方々も、私を通じて日本人に好意を抱いていただいたのではないかと、思っている。

僕の通っている高校は、国際教育に力を入れているので、海外への留学や海外からの留学生の受入も多く行っている。そのような環境なので、私の周りには留学生も結構いて、コミュニケーションを取る機会が多くある。今回のこの中国での経験から、その留学生とまずは話してみる、そして一緒に何かをする事から始め、色々な違いに気づき、興味を持ち、尊重し合うことが本当の意味で仲良くなる、というように感じた。僕にとって、国際教育で一番大事なことはなにかというと、それは国際理解であり、「お互いの文化を尊重し、よく聞き、よく話しあう」ということではないかと思うようになった。

日本と中国の人々の交流が、僕が体験した小さなスポーツ交流や文化交流の積み重ねがとても大事ではないかと考えている。このような交流が個人の繋がり架け橋となり、その小さな架け橋の積み重ねが、国と国の深い絆を持つ大きな架け橋になるのだと考える。これからの日本と中国の平和な架け橋のために、僕も国際理解に貢献できる人間に成長していきたい。

# 「Panda 杯全日本青年作文コンクール 2019」 訪中プログラム感想文



公益財団法人日本科学協会  
業務部国際交流チーム

# 目次

聖心女子大学 文学部国際交流学科 3年	高塚 小百合 . . . . .	2
フリーター (就職活動中)	南部 健人 . . . . .	2
慶應義塾大学 文学部人文社会学科 2年	清水 若葉 . . . . .	3
京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 5年	大谷 琢磨 . . . . .	4
女子美術大学 芸術学部アートデザイン表現学科ファッションテキスタイル領域		
	勝俣 友加里 . . . . .	9
立命館宇治高等学校 IMコース	西山 佳子 . . . . .	10
東京学芸大学 教育学部中等教育教員養成課程書道専攻 3年	高橋 杏里 . . . . .	11
東京農工大学 工学部機械システム工学科 1年	田頭 尚大 . . . . .	13
慶應義塾大学 法学部法律学科 1年	幸田 遼 . . . . .	13
聖心女子大学 現代教養学部 1年	石川 春香 . . . . .	14
神戸市外国語大学 外国語学部 中国学科	北村 美月 . . . . .	16
関東国際高等学校 外国語科 中国語コース	井内 英人 . . . . .	17
京都大学大学院 農学研究科応用生命科学専攻修士 1年	出石 佑樹 . . . . .	17
郁文館夢学園 高校 2年	張替 千翔 . . . . .	18
	日野 鈴香 . . . . .	18
和歌山工業高等専門学校 環境都市工学科 2年	瓜生田 彩月 . . . . .	19
◀ Panda 杯運営実行委員 ▶		
東京学芸大学 教育学部 3年	小嶋 心 . . . . .	21
日本女子大学 人間社会学部 2年	日暮美音 . . . . .	22

今回の研修旅行を通じ、「互いの国に興味を持つこと」が日中友好のカギではないかと思った。私はもともと中国にとっても興味があったし、初めて中国を自分の目でみることができる期待感を胸に旅行に旅立ったはずだった。しかし、北京や西安で交流した学生の日本への興味は、私の中国への興味をはるかに上回っていた。アイドルグループ・嵐がきっかけで日本を好きになり、日本語を母国語のように喋る学生や、ジブリ映画が大好きでいつか三鷹のジブリ美術館に行きたいと語っていた学生の目は輝いていて、日本への興味が本物であることを教えてくれた。一方私は、彼らのように相手の文化のここに興味がある・あそこに興味があると詳しく言えなかった。自分がとても勉強不足であると感じたし、中国の文化や中国という国自体についてもっと詳しくなりたいと思った。だからこそ今回の旅行で、故宮や兵馬俑などの長い歴史が育んだ文化を学んだり、空海ゆかりの青龍寺や、阿部仲麻呂記念碑など日本とのつながりが深いスポットを回り、中国と日本の交流の歴史について学んだりできたことは、中国の歴史に興味がある私にとって大変貴重な経験となった。

中国で出会った学生たちの目の輝きを忘れることはないだろう。次に中国に行く機会があれば、中国語をさらに学び、中国語で中国の文化について語れるくらいになって行きたいと思った。私のように中国の文化に興味を持つ日本人が一人でも増えれば、日中友好はさらに進展すると思った。

#### フリーター（就職活動中）

南部 健人

2019年度パンダ杯の研修旅行では北京と西安をおよそ1週間近くの時間をかけて回った。毎日、濃密なスケジュールで、観光地を回るだけでなく、行く先々で学生ボランティアをはじめ、様々な人たちとの交流があり、多くの思い出が残る旅になった。

個人的に北京でもっとも思い出に残っているのは、3日目の学生ボランティアと北京観光をした日だ。ボランティアメンバーは主に日本語学んでいる中国人学生だったが、他にも三名の社会人のメンバー、そして日本語の話せない大学院のメンバーも参加していた。

前日に、僕たちが回るコースを、社会人メンバーの楊さんがひとりで下見をしてくれたことを、人民中国の陳克さんが教えてくれて、そのことにまず胸がとても熱くなった。社会人メンバーは普段は仕事でとても忙しいなか、わざわざ休日の時間を使って、僕たちと一緒に北京観光をしてくれており、そのなかで更に自分の時間を削ってくれたことに、深い感動を覚えた。楊さんは47都道府県のうち42の地を訪れたことがあるようで、平均的な日本人よりも日本をたくさん回っているのではないかと思う。大学院メンバーの李さんは、日本語が話せなかったが、中国語と英語を交えて会話をしていると、彼女は美術史を専攻していて、日本の浮世絵にとっても興味があると教えてくれた。彼ら彼女らの話を聞きながら、僕も中国のこと、そして日本のことをもっと深く知り、そしてそれをきちんと言葉で説明できるようになりたいなど改めて思った。他のメン

バーとも、仕事のことや、普段の生活のことなど、様々な話をしたが、1日では語りきれないことがたくさんあった。ここで出会えた縁を大切に、これからも中国や日本で、何度も再会の機会を作っていきたいと強く思った。

西安でもたくさんの場所を訪れたが、全体を通して、西安の持つ悠久の歴史そのものがとても印象に残った。そう感じる事ができた大きな理由のひとつが、バスガイドの康さんのガイドが大きかったと思う。康さんの流暢な日本語解説によって、たくさんの疑問が氷解していき、西安についての理解が少し深まったように思う。

例えば西安旅行の一番の見どころであった始皇帝陵の兵馬俑では、実は個人的に長年の疑問であった、どうして始皇帝はこの場所に巨大なお墓を作ったのか、というのがあった。兵馬俑の近くには山に囲われていて、どこか霊山を思わせる幽玄な雰囲気漂っている感じはするのだが、ただ単に風水的な理由だけで、そこに作ったのかどうか、個人的にはずっと気になっていた。康さんの解説によると、始皇帝陵は長安の東にあり、古代の地図をもとに考えると、秦にとっての脅威となるべき国々はすべて東側にあったということだった。なるほど、そこにも極めて現実的な理由があるのは、とても中国らしいと思い、戦略家としての始皇帝の顔がそこに少し見えたような気がした。

そんな流暢な日本語で西安の歴史を語る康さんは、驚くべきことに、日本へ留学したことも、旅行に行ったこともないそうだ。詳しく話を聞く機会はなかったが、康さん曰く「自分が若かった頃は、留学をしたり日本へ旅行したりすることは、今のように簡単ではなかったんだ」ということだった。仕事で忙しいとは思いますが、いつか康さんが日本に来ることができれば良いなど、その話を聞いて僕は思った。

多くの中国の人たちと等身大で交流することができた一週間だったけれど、研修旅行のメンバー、そして人民中国のスタッフたちと、濃密な時間を過ごすことができたのも、間違いなく大切な財産となった。特に、西安最終日でみんなで夜行列車にのったことは本当に良い思い出になった。様々なゲームで遊んでげらげら笑いあったことも、消灯後もお互いの夢などについて真剣に語り合ったことも、忘れられない一時になった。

僕たちが列車に乗った日は、旧暦の7月7日、つまり七夕の日でもあった。西安を出てしばらくすると、列車はあたりに何も無い農村地帯を通過していた。そのとき、遠くの夜空に打ち上げ花火が何度もあがるのを見た。あたりに何の光もなかったこともあり、その花火が殊に明るく感じられ、また旅の終わりが近づいていることも同時に強く思った。色々な思いが胸に去来しながら、その景色が心の深いところに収まっていくのを僕は感じた。

慶應義塾大学 文学部人文社会学科2年 清水 若葉

「孤之有孔明 猶魚之有水也」この漢文は、三国時代に劉備が三顧の礼で迎えた諸葛孔明との親密な交友関係を表しています。魚に水があるような仲という意味である「水魚の交わり」とい

う言葉の元になった漢文であり、なくてはならない関係を表す語句となっています。日本と中国がこのような関係になるために尽力を尽くしたいと、この研修を通して思うようになりました。交流を通じて、中国という国を身近に見ることができ、中国に対する理解も深められました。自分の目で見て、心で感じ、自分が知らなかったことへの良さを発見することは、異文化理解の第一歩になると思います。

これからの未来を担うのは、私たちの若い世代です。若い世代のエネルギーは、歴史認識を乗り越え、相互理解と相互信頼に基づく新たな日中関係を切り拓くことが出来ると考えます。これからの日中両国を担う若い世代の交流が拡大されることを私は切に願っています。

最後になりましたが、パンダ杯開催にあたりご尽力頂きました皆様に、心より感謝申し上げます。有難う御座いました。

京都大学大学院 アジア・アフリカ地域研究研究科 5年 大谷 琢磨

2019年8月2日（金）

中国に到着すると、いきなり真っ赤な柱が目飛び込んできた。バスに乗って移動すると、街には高層ビルが立ち並んでいるが、窮屈さを感じない。空が広い。国道は車線がいくつもあり、先まで見通せないほど続いている。なんて広いのだろうと感嘆し、中国に来たことを実感した。ホテルは北京の中心部に位置し、官庁とオフィス街が軒を連ねている。周りには小売店のようなものが少ない。ホテルに到着してから2時間ほど休憩時間があつたので、近隣を散策した。たまたま見つけたスーパーに入る。入り口には大きなスイカをはじめとした、色とりどりのフルーツや野菜が並んでいる。他にも穀物やナッツ類、調味料が豊富に陳列され、見ているだけで飽きない。

夜の晩餐会は、中国式のしゃぶしゃぶだった。信じられないくらいの量の肉がサーブされた。どんどん持って来られる肉の量を見て、食べきれないことを確信した。しかも、人民中国の方が、気を抜くとすぐにまだ食べられるか確認し、言い終わらないうちに追加の肉を注文した。もう訳が分からなかった。出された肉は、牛肉も羊肉も美味しく、結果的にすべて平らげてしまった。初日の夜から、圧倒的な熱量の歓迎を受けた。歓迎の雰囲気気分が高揚し、白酒を乾杯し飲み干した。お酒は弱い方で、普段アルコール度数の高いお酒はあまり飲まない。しかし、中国に来た興奮と歓迎を受けた喜びから、のどに広がる熱さが心地よく感じ、とても気分がよかった。文字通り「熱烈歓迎」を受けた初日は、気分の高揚の中で終わった。

2019年8月3日（土）

朝は忙しかった。朝食の会場がホテルの24階にあるのにもかかわらず、22階止まりのエレベーターが6台中4台あつて移動に時間がかかった。結果的に、10分ほど遅刻した。バスに乗って園芸博覧会の会場に移動した。出発から20分ほどで景色が一変する。樹木畑が広が

っている。果樹園だろうか。1時間ほどで会場に到着した。カートに乗ってホールに移動し、歓迎のあいさつを受けた。園内は、約500haあるらしい。東京ディズニーランドが約51haなので、ディズニーランド10個分に相当するらしい。これも広すぎて訳が分からない。だが、移動はカートだったので疲弊はしなかった。

園内に入った当初は人が少ないと思ったが、パビリオンの中は混雑している。はじめに中国館を見学した。中は混雑し、ゆっくり見られなかったが、中国各省の特色が園芸で表現されていた。チベット館の冬虫夏草や、四川省の竹でできたブースなど、本当に特色豊かだった。今回の旅では、北京と西安という2つの都市しか訪問できないため、中国各省の雰囲気、園芸を通して感じられるのは、とてもありがたかった。他にも、北京館では、絵になるような花々が咲き、華やかだった。それとは対照的に、浙江省館は、質素だが豊かさがあるように感じた。日本館では、2週間に一度、展示を入れ替えていると聞き、日本の力の入れようが伺えた。生活館では、鼻タバコを体験した。

中国のかなり大まかな雰囲気を体験できた1日だった。明日以降の、北京散策が楽しみになる内容だった。

2019年8月4日（日）

今日は朝食をゆっくりと食べられた。改めて見ると、一般的なメニューからお粥、麺など中華メニューもある。24階ということで眺めも良いが、外はあいにくの曇り。

今日は、現地で日本語を学んでいる学生と北京を散策。しかし、自分は中国語を全く話せない。ウガンダで言葉が通じない状況は嫌と言うほど経験し、乗り切ってきたが、多少不安だった。しかし、スタッフから渡された東京バナナを隣にいた中国の学生に渡し、会話のきっかけを作ると、すんなりと会話を始めることができた。ウガンダで現地の友人に東京バナナをあげた時も大喜びだった。東京バナナがおいしいと思うのは万国共通のようだ。

英語と日本語、ジェスチャーを交えて会話をし、相手も頑張ってくれようとしているのが、うれしく感じた。だがやはり、自分が中国語を話せないことでコミュニケーションの幅が狭まるため、かなり歯がゆい。ウガンダでもこういう状況は山ほど経験してきたが、大変だ。

話をした中国の学生は、おとなしそうな見た目だが、フェンシングをやるスポーツ少女で毎日走っているらしい。内モンゴル自治区出身で、大学院から北京大学に来て、古代の漢字を研究しているそうだ。北京には、本当にさまざまなバックグラウンドの人が集まっているのだと感嘆した。北京大学に到着。入場にセキュリティチェックが必要らしい。中は街路樹が並び、緑豊かなキャンパスだった。古くは50年以上前の建築物もあり、歴史を感じた。キャンパス内には未明湖という湖があり、趣がある。ここには各地から親が子供を観光で連れてきて、目標にさせるそうだ。昼ごはんは、近く中華で広東料理を食べた。北京料理とまた違って美味しい。隣に座った中国の大学院生が、日本語で書いた卒業論文を見せてくれた。パラパラと目を通すと、内容も充実して、これを第二言語で書いたのかと、驚愕した。と同時に、日本語が母語の自分が論文に手間取っている状況を反省した。

昼からは頤和園を見学。ここは本当に人が多い。中央の湖には島があり、趣深い。一大観光地だというのがわかる。寝所や長い廊下など、見どころが多かった。

夜は火鍋を食べた。辛い美味しい。中国の学生と、恋愛の話も含めて、ざっくばらんな話を

した。話は盛り上がり、22時まで続き、終電ギリギリで帰った。

中国の学生との交流を通じて、自分とは関係がなく、無関係だと思っていた中国の人々と自分との心理的な距離が、急激に縮まったことを感じた。

2019年8月5日（月）

今日は、朝から中国人民雑誌社で授賞式だった。外文局の建物は広く立派で、これまで案内をしてくださった人民中国の方々がすごい人たちなのだと、改めて感じた。式典は参加者が多く、報道関係者も多かった。外文局局長の挨拶で自分の作文に触れていただき、中国の一路に対する期待の高さを実感した。代表で感想を述べた際には、前に並んでいる来賓の方々が、うなずきながら聞いてくださっているのも印象的だった。

その後の昼食会は、ひさびさに中華以外の食事だった。ホテルの洋食のようなイタリアンで、おいしい。昼食後は北京駅へ。高速鉄道に乗るために構内に入るには、身分証明と荷物検査が必要。夏休みということで混雑しており、多くの人が鉄道を待っていた。

高速鉄道の中は、307km出るといのが印象的だった。また、北京から1時間ほど離れたあたりから景色は畑が増え、周囲の建物も農村のような低い家が増えた。西安に近づくと、山が増えてきた。景色の変化が印象的だった。西安につくと、西安北駅も非常に大きい。そのままバスに乗り、西安の街なかを移動した。西安の街は、北京と違い、飲食店や美容院、小売店が立ち並んでいた。到着した回民街は、ネオンがかがやき、屋台が並び、人通りが多く活気にあふれていた。活気のある雰囲気、ウガンダを思い出し、歩くだけでワクワクした。夕食は西安料理で、香辛料を使った独特な味だった。辛味や甘み、などさまざまな味が楽しめた。西安の都はライトアップされ、きれいだった。

北京から西安まで約1,200kmという距離を移動した。これは、東京から福岡までの距離に相当する。ケニアのモンバサからウガンダのカンパラまでの距離よりも長い。ここまで移動しても、中国においては、国土の一部でしかない。改めて、その壮大さを感じた。また、2つの都市を見学し、中国の多様さの片鱗を見ることができた。明日からの西安散策が楽しみだ。

2019年8月6日（火）

午前中、兵馬俑を見に行く。とんでもない数の人が兵馬俑を見ようとうごめいていた。真ん前のいい位置で見ようとすると戦争のように人を押しのけて見なければならなかった。それでも、なんとか押しつけて一番前まで行くと、大量に並んだ兵たちの迫力は凄まじかった。一人ひとりの表情や体型、顔が異なり、髪の毛の一本一本にまで気を配られ、個性にあふれていた。兵たちは、同じ方向を向いてはいるが、みな同じ目的で立っている。孤独な群衆ではないだろう。

その後、兵馬俑づくりをした。粘土をこねて型にはめるだけで、実演もしてもらったが、うまくできない。足が不安定だったり、型を間違えたり、首が取れたりした。最終的にできたものは、生のまま持って帰るが、家につくまで無事か心配だ。

そのあと、三蔵法師がインドから持ち帰った経典を保管しているという大雁塔へ。600年代の建物がまだ残っていることに感動し、中国の歴史の壮大さを感じた。

夜は晩餐会だった。西安料理の数々が振る舞われた。金メダルチキンという名物があり、毎年賞を取っているという。鶏肉は非常に柔らかく、今回の食事でも1,2を争うくらい美味しかった。

西安は平城京や平安京の手本となった街ではあるが、スケールがはるかに大きい。自分が住んでいる京都と、今回の西安という 2 つの街の共通点を見つけつつも、いかに当時の長安の街が和人にとって強大であったのかということを実感した。

2019年8月7日（水）

毎日食べきれないほどの食事をサーブされ、食べ過ぎの反動で日に日に朝食の量が減っている。この日は、西安外国語大学日本語専攻の学生と西安を観光した。現地の学生は、1～2年生で、まだ学び始めだという。女の子がほとんどだった。彼女たちは、日本語と英語があまり話せないようで、中国語が全くできない自分にはコミュニケーションを取ることが一苦勞だったが、ウガンダで身につけたコミュニケーションスキルで身振り手振りを交えて伝えようとし、また相手も自分の言わんとしようとすることを理解しようとしてくれ、また伝えようとしてくれたので、とても楽しく会話できた。印象的だったのは、日本語を学ぶ理由として、日本語が可愛いからというものがあったこと。日本語が、外国の方からはそのように認識されているのかと思い、興味深かった。

観光では、阿部仲麻呂の記念碑がある公園に行った。公園では、朝から高齢の方々がダンスや合唱をいたるところでして、中国の日常を感じた。阿部仲麻呂の記念碑では、李白から阿倍仲麻呂に送られた漢詩が彫られ、1,000年前の友情を感じた。教科書の中の一人物でしかなかった阿部仲麻呂と李白が、初めて実態を持った人間として感じられた。そして、1000年以上前の中国の人と日本の人の友情を現代でも感じられたことに熱い思いがした。

続いて、空海とその師匠の交流に関する展示が色々あり、日本と同じくらいの展示量があった。中では赤い紐に願いを書いたものが木々に結ばれており、自分も1つ購入して書いてみた。ご利益がありそうだった。午後は、碑林博物館に行った。書道の手本となる玄宗皇帝の文字や、平成の語源となった部分を見た。書道が博物館になるという状況は、いかに書道が文化的に中国にとって重要か認識した。

その後、西安の城壁へ。城壁は巨大で、売店が複数あり、カートが走っていた。日本では考えられない規模で、驚いた。

城門のあとは、急いで夕食へ。12種類の餃子を急いで食べて、駅へ。学生との別れは時間がなく、手早いものだった。それくらいの方が湿っぽくならずいいのかもしれない。

そして、夜行列車に乗る。自分のイメージは2段ベッドが個室で別れているものだったが、三段ベッドが共通の廊下に沿って並んでいた。みなで同じ列車に乗り、寝るというのは、修学旅行を思い出し、とても楽しかった。寝台列車に対する思い出というのは、このように美化されるのだろう。

列車に揺られながら西安の思い出を振り返り、西安にはまた訪れたいという気持ちが強くなった。次回は多少の中国語を話せるようになったうえでだが、現地の学生との交流は、この研修旅行がただの観光に終わらないためにも、重要なプログラムだったように思う。事実、交流は非常に楽しかったし、中国との心理的な距離はさらに縮んだ。

2019年8月8日（木）

はじめての寝台列車は、疲れていたせいか、朝まで起きず、しっかりと寝られた。日本の「世界

の車窓から」という番組の世界にいるようだった。何度も物売りの男性と女性が往復していて、見ていて楽しかった。フルーツやお弁当、スナックなどを売っていた。

北京につくと、あとの移動は慌ただしかった。駅から、そのまま北京ダックで有名な老舗レストランへ。10分ほど自由行動ができたので、近くのお茶屋で茶葉を買った。

レストランでは、国賓が使用してきたという特別な部屋を利用させてもらった。アヒルのフルコースが振る舞われ、どれも美味しかった。名物の北京ダックは、ジューシーでタレの味もよく、感動を覚えた。

昼食後、空港へ。今回の研修旅行は、たった7日間ではあったが、濃密な日々だった。

## 全体の感想

羽田空港からの帰路、品川駅へ向かう道で中国語の会話が聞こえてきた。無意識に、何を話しているのだろうかと耳を傾けた。中国語など、まだわかるはずもないのに。そこには、研修旅行を終えて、中国語に懐かしさと親しみを感じる自分がいた。今まではそんなことを露ほども感じなかった。例え、ウガンダの中華料理レストランで中国人の店員が何かを話していたとしても、私にとってそれはただの周囲の音でしかなかった。それが、いまや、中国語を言葉として、会話として聞いている自分がある。

中国で見たものは、どれも目新しかった。見学した頤和園や兵馬俑、北京大学はどれもスケールが大きく、圧倒されてばかりだった。しかし、よく目を凝らして、考えてみると、日本でも見たことがあるものも多かった。案内や説明は漢字で書かれ、意図されている内容くらいは予想できた。碁盤の目状に整備された西安の街は、規模こそ違えど、京都と共通する部分を目にした。景観や文化の面でも、中国と日本は、赤の他人ではなかった。

食事の席につくと、毎回、食べきれないほどの量の料理がふるまわれた。食べても食べても出てくる料理に、はじめは、信じられない思いがした。それでも、出された料理はどれもいい匂いで、そしておいしい。毎度、皿を空にしようとはがんばって食べたのだが、最後までその思いはかなわなかった。むしろ、夕食を食べ過ぎて、次の日の朝はおかゆしか入らないという日が続いた。それでも、一度も中華料理をもう食べたくないと思うことは一度もなかった。対照的に、ウガンダでは、毎日主食用バナナと豆のスープしか食べられず、絶望し、バナナがのどを通らないという日があった。多彩で、日本の私たちにもなじみがある料理が出てくる中国は非常に居心地が良かった。

中国で交流した学生は、とても親切で温かかった。その学生たちは、北京と西安でそれぞれ1日ずつ交流した。相手の学生は、女性の割合が多かった。彼女らは、日本語を学んでおり、多少の日本語は理解できるようだった。それに対して自分は、まったく中国語ができない。このような状況の中、自分は、日本語と英語、ボディランゲージ、翻訳アプリを駆使して、何とか意思疎通を図ろうと努めた。そんな自分に、彼女らは、真摯に耳を傾けて私の言わんとすることを理解しようとしてくれた。相手の言語が分からないという状況は、ウガンダで嫌と言うほど経験してきた。それでも、意思疎通が図れる量や内容には限界がある。中国語ができないということが、心から歯がゆく感じた。夜になり、彼女たちと別れた後、もっといろいろ話したかったと切に思った。そこに、ナショナリティという境界はなく、友人同士という関係だった。

私は、今回の研修旅行で、五感すべてで中国を感じる事ができた。日本において、中華料理を食べて、中国からの観光客を見て、中国からの留学生と交流しても、どことなく中国は遠く感じていた。今回初めて中国を訪問したことで、霧がかかった中国と中国の人に対するイメージが、急速に具体的な像として自分のなかに形作られたことを感じた。今まさに、作文にも書いた「遠い隣人」が、「隣人」になったのである。今後も、この「隣人」と何ができるのか、研究生活を送るなかで、考えていきたい。

**女子美術大学 芸術学部アートデザイン表現学科ファッションテキスタイル領域**  
**勝俣 友加里**

私が特に印象に残ったのは3日目のボランティアの学生さんと北京大学と街を散策したことです。お昼は広東料理のガチョウを人生で初めて食べ、脂が甘くて美味しかったです。私が一切れのガチョウを取ろうとしたのですが、ほかの肉とくっついておりなかなか取れずジャージャー君が箸で抑えてくれていました。日本には二膳の箸を使って物を取らないというマナーがあります。納骨の時のお骨を集める時と同じになってしまうからです。なので、私は指でガチョウを取ったところジャージャー君は驚いていました。黄先生が日本のお箸のマナーを紹介してくださったところ、他のボランティアの学生さんも驚いていました。私の隣に座っていたよっちゃんも1年間日本の大学に留学していたらしいですが、知らなかったようで食事の何気ない行為が文化の違いを知れる機会になり有意義な食事の場になりました。日頃日本にいと、中国語を勉強したい中国文化をもっと知りたいと思っても限界があると思います。しかし、今回のように同じ場で食事など同じ時間を共有することは、テレビやネットの情報以上に知れることがたくさんあり、さらに考えるきっかけを与えてくれました。自分の目で見て耳で聞いて、感じる事が大切だと思いました。

北京で学生ボランティアとして参加してくれたジャージャー君は日本語で北京大学の歴史などを紹介してくれました。しかし、まだ日本に一度も訪れたことがないと言っており私たちはとても驚きました。以前、中国人の友人に語学勉強には何が大切か聞いたところ環境が一番大切と言っていました。しかし、今回の訪中では自分の努力で日本語を習得している方を何人も見て中国の方の勤勉さを感じるとともに、彼らの日本を知りたいという気持ちがそうさせているのかと感じました。訪中の間何度も、もっと中国語ができれば知ることが出来たと感じる場面がいくつかありました。相手の言語力に甘んじるのではなく次は自分の力でどんどん中国を知っていきたいです。中国は自分に刺激と課題を与えてくれたと思います。中国にいてもいなくても、日本にいてもいなくてもお互いを知る手段はあり、気持ちと努力次第でどうにでもなるということです。しかし、次はジャージャー君に日本を見せてあげたいと強く思いました。訪中の間に交流した方々は、日本語が話せる人話せない人、日本に行ったことがある人ない人。私たちも中国に行ったことがある人初めての人、中国語が話せる人話せない人など、経験が皆違

いました。しかし、お互いのことを知りたいという気持ちがあったのは共通だったと思います。その時の気持ちを忘れずに中国語や今回興味を持った中国の歴史を勉強し、交流の手助けになることを続けていきたいです。

## 立命館宇治高等学校 IMコース 西山 佳子

まず始めに、今回私をこのような素晴らしい旅に連れて行って下さった全ての方々に感謝します。

正直なところ、初めてお会いする方々と一週間を過ごさせて頂くことへの不安や、受験生ということもあり、始めは訪中を躊躇っていました。しかし、スタッフの方々を含む受賞者の皆さんは、本当に優しく、学ばせてもらえるところが沢山の素敵な方達で、年齢が違うにも関わらず、すぐに打ち解けることができました。本当にこの訪中団の一員になれて嬉しい気持ちでいっぱいです。

北京散策時に訪れた頤和園は、まるで映画の世界に引き込まれたように神秘的でした。また、同じく北京散策での日本語を学ぶ学生ボランティアの方々との出会いは、私にとってとても印象的でした。電車での移動中から観光中まで私たちの話は尽きることはなく、夕食時には一つの火鍋を囲んで、初めて会う日とは思えないくらい濃い、濃い話をしました。ボランティアさんがどうやって日本語を学ぶようになったか等の経緯を聞き、彼らが真剣に日本語学習に向き合う姿を見て、私もこんな風になりたいと決心しました。いつかまたお会いできる日が来るのならば、次は日本語ではなく中国語で彼らとお話しをすることをここで約束します。

また、一人の仲良くなった学生さんからは、別れた後「信頼されているお兄ちゃんになった気分が嬉しかったよ」とメッセージが届きました。中国で兄弟のような頼れる存在ができたことがとても嬉しかったです。そしてこの時、日中友好の未来を私は確信しました。私たちが暖かい気持ちを持ち、互いに歩み寄ることの大切さをこの旅が教えてくれました。

西安に移動し、私は伝統的な歴史の残る街に恋に落ちました。その街並みは私の住む京都を感じさせるものが多くあり、所々故郷へ戻ったような気がして、ホッとしました。特に、西安外国語大学の学生さん達との交流は、貴重な時間となりました。私のバディである女の子との別れはとても惜しく、一生懸命思い出を残そうと、写真やビデオを100枚ほど残しました。私はこの先、彼女のことを忘れることはないでしょう。

この7日間を通して、中国の方々の「おもてなしの心」に触れる機会が多くあり、それらの温かい心に触れる度、中国という国が更に更に好きになっていく自分がいました。食事の際には、毎回たくさんの方々から下さる歓迎のスピーチからも、私達がどれだけ中国の方々に歓迎してもらっているのを感じさせてもらいました。

私はこの7日間で見えたもの、聞いたこと、感じたことを絶対に忘れません。そして、今回この素晴らしい日程を全て終わるためにサポートして下さった全ての皆さまに恩返しができるよう、

これから中国語の勉強を含め、頑張ります！！

東京学芸大学 教育学部中等教育教員養成課程書道専攻3年 高橋 杏里

「中国、どうだった？」帰国してすぐ夕食を共にした友人に、運ばれて来たグラスに口をつける間もなく尋ねられた私は、訪中での思い出を余すところなく語った。興奮冷めやらずに語り続ける私に、友人は少し戸惑ったような様子を見せた。そして私にこう言った、「でも、怖くない？」と。私は何が怖いのか、まったく分からなかった。しかし「なぜ？どうして？」話を聞くうちに、その内容が理解できた。その友人の訪中経験の無さもあるが、歴史的な面から日中関係に焦点を当て、中国において日本人は嫌悪感を抱かれていると思っており、私にこう言ったのだった。その友人とは入学当時から共に、留学生のサポートと留学生と日本人学生の交流の場を作る活動を共にしており、共通理解も図れているものと思いこんでいた。ショックだった。そして同時にこれが私の役割でもある、と感じた。実際に訪中した私が、ありのままの中国を伝えること、この小さな行動がさらなる日中友好のきっかけになる、ということ。

8年前に訪中した際の中学生の私も、この友人と同様に先入観と固定観念を抱いていた。私の身の周りの小さな世界で、私が作り上げた中国が事実だと信じていた。その結果、中学生の私は、自分が思い込んでいた中国の雰囲気ギャップに驚き、主観的な見方しかできなかった。本場の中華料理の辛さ、大陸の広さ、すべてが新鮮だった。しかし、客観的に物事を見ること、先入観や固定観念を捨てて曇りのない目でありのままを見ることが大切だ、と私は今回の訪中前に考えた。そして今回、客観的に物事を見つめることを胸に刻み、中国へ向かった。

北京に降り立った瞬間に胸いっぱい吸い込んだ空気には、砂っぽさも独特な香りもなく、新鮮な空気だった。視界には、工業化の風景というより緑が飛び込んできた。それを象徴するかのような園芸博覧会では、各省ごとのまるでアートのようなブース、植物園、最新技術で生み出された美術館のような建物や様々な国々が集う国際館など、それらの大きさだけでなく、技術の高さや創意工夫にまで魅了された。西安では、兵馬俑や碑林博物館などが長い歴史と共に残り、中国やアジア域内にとどまらず、欧米諸国からの訪問者までも魅了していたことは印象的だった。様々な国々から訪れる人々の心に残り、人々と共に、そして時代と共にこれからも生きていくように感じられた。私は書道を専攻していることから、碑林博物館には特に魅了された。今まで、書籍や図版でしか見てこなかった写真を実際の目の前にすると、作者の息使いや刻まれた時の長さや重なり、今まで理論と想像でしか感じられなかったものが、体験となって私の中に落とし込まれた。体験は様々な物事と結びつき、自らの中に深く刻まれていく貴重なものだと実感した。

そして特に忘れてはならないことは、様々な人々との出会いである。記者の方々や中国の

学生、訪中団員などそれぞれが異なるバックグラウンドを持ちながら共に時間を過ごした。仲良くなった大学院生は、言葉は上手く通じないものの、筆談や通訳を通して会話を楽しんだ。そして別れ際に私に“*I miss you.*”と言ってくれた。時を共にすることは互いの心を繋げ、かけがえのない絆を生み出した。大学一年生の女の子は現在日本語を猛勉強しているようだが英語が流暢で、私と英語で話しをしてくれた。彼女とはメッセージアプリを通じて今もやり取りをしており、彼女は私の中国語の良き師である。彼女と出会ってから少しずつではあるものの、私は中国語を勉強している。出会いは体験と心の交わりであり、人にあたたかな光と変化をもたらす。今回の訪中で、中国は隣国でありながらその環境は私が毎日生活する日本と異なることを改めて実感した。言葉は通じず、中国語を学んでいたらもっと会話を通じて本質に迫り、より多くの物事を自分自身で知ることができただろうに、という後悔に何度さいなまれたかわからない。だからこそ、目で耳で体で、受け取れるものはすべて自身に刻むことが重要だろう。

私は現在、小学生が国際交流をする場を設ける NPO 法人の大学生メンバーとして活動している。小学校2年生や3年生といった低学年が中心で、彼らがグローバルに活躍するきっかけのサポートをする。同時に、来月から高校での芸術科書道の教育実習を行い、そこでは「先生」と呼ばれながら三週間を過ごす。ありがたいことに、今回の充実した貴重な体験を伝える相手がたくさんいる。私を感じたすべてを、言語化して彼らに興味・関心を持ってもらうきっかけにするにはどのようにしたら良いか。これは、幸せな悩みだろう。私と友人のように互いの考えが異なり、疑問を抱いた時はそれを詳しく聞き、すれ違いを無くしていくことが大切だろう。考えの違いや意見の食い違いそのものが、関係の悪化を招くのではなく、その背景にある本質に迫らず、思い込みで生み出される誤解が良好な関係形成を妨げるのではないか。先入観や固定観念は、視野を狭め、目を曇らせる。ステレオタイプで決めつけないことも大切であるが、私自身が目で耳で体で感じたことすべてを伝えていくことこそが、日中友好に果たせる私自身の役割であるように感じた。常に多くに関心を持ち、曇りのない目で物事を客観的に捉え、理解し、伝えることが小さな一歩である。自分の狭い世界だけで考えずに、ゆっくり一つずつでも確かに、それが中国と日本をさらに強くつなぐきっかけになるように。

当初、怪訝そうな表情で私の話を聞いていた友人は、だんだんと関心を持ち、私に中国に抱いていたイメージと本音を打ち明けてくれた。写真を見て、時に笑顔を見せて自身の経験と重ねながら、隣国でありながら知らないことだらけだった中国に、驚きともっと知りたいという気持ちを私に語ってくれた。私の伝えたことだけが全てではないから「私の話はほんの一部、自分の目で見るともっと感動する。」と告げ、私は氷の解けたグラスの水を飲みほした。するとその友人は私にこう告げた、「私も中国に行ってみたい。」と

今回の研修旅行は私にとって初めての海外研修であり、とても新鮮で貴重な経験として私の胸に刻まれることになったと感じている。私は作文コンクールの作品として、中国から渡ってきた家族との交流について書いた。日本での偶発的な国際交流としてこの経験も十分有意義であると今も感じている。しかし、研修旅行として実際に日本を離れて中国の空気に触れ、雰囲気とともに暮らしを少し体感したことで、新たに中国と日本のつながりについて考える機会が与えられたことを実感している。

研修旅行として園芸博覧会・故宮・兵馬俑・青龍寺などを巡り、中国料理の本場を味わうことは、中国の歴史や文化の規模が日本に比べ遥かに壮大な面をもつことを実感させ、今まで写真や模造品でしか見たことのない数々の本物を目の前にして深く感動した。ただ、やはり研修を終えた今なお強く思い起されることは、北京・西安で出会った現地の学生や人民中国雑誌社の方々と実際に顔を合わせて話したことである。この研修で交流した日本語学科の学生と交流することで、彼らがアニメや音楽などの様々な文化にそれぞれ感銘を受けて日本語を学ぶことを志願したことや、中国での学生としての暮らしがどのようなものかということを知ることができ、彼らの優しさや思いやりに触れ、中国から見た日本の暮らしについても具体的に思い描かされた。ここで、日中関係などという国家的な言葉で示される複雑な会談から離れ、実際に隣国の仲間として人間的に交流することはやはり夢物語とは決して違ふと考えさせられ、自分が将来の技術者として、またはそれ以前に一人の日本人旅行者として再び中国に戻るようなとき、また見えない壁を一つ越えて親しく交流し協力し合うような関係を必ず築くことができるといふ希望や、自分もそういう態度でなければならないという一種の使命感を思った。

最後に、4日目の人民中国雑誌社見学で編集長の方から聞いた雑誌社としての決意が心に残っている。この先もパンダ杯を含めて新たな表現手段を模索しつつ、両国の親交を含めたより良い日中関係を目指すという力強い姿勢は、未だ学生の身であっても持つべき理念であり、このような人々があってこそその真の友好があるのだろうと考えた。今回の研修旅行で美しい経験をさせていただいた主催者の方々には感謝しきれない程、良い7日間になったと考えている。

今回の中国研修旅行から帰宅し、体重計に乗ってみると3kg増えていた。わずか1600字の作文を書いた身分で幸運にも北京・西安宛への切符を手にしてしまったところか、現地では「欢迎, 欢迎」と人民中国の方々が言うままにほぼ毎日回る食卓につき、中国料理を堪能してしまった結果だ。料理の美味しさは好吃だし、量は中国くらいのスケールだったから仕方ないよな、うん。それに、ホテルも星5ランクに泊まらせてもらった。西安のホテルなんか一人部屋に複数のベッドがあったから、隣の部屋の仲よし女子組たちはプチお泊まり会を開催していた。このおもてなし

具合には滝川クリステルさんもびっくりだろう。

さて、普段はもてなされるどころかモテない私は、この暮らしに耐えきれず、旅行開始から3日目に熱を出してしまった。なんという隠キヤ具合だ。流石の比企谷八幡も畏れているに違いない。この日は有志で集まってくれた学生と北京市内を散策する日だったのだが、私は体調が絶賛不良中だったので、夜のディナーを諦めて先にホテルに帰らせてもらうことにした。この時、約半日行動を共にした現地の学生2人が、私の体調を気遣ってすぐさまタクシーを呼んでくれた。中国では、アプリで近くのタクシーを検索してきてもらうUberみたいなシステムがあるのだ。日本でも普及すればいいのに。ともあれ、みんなより一足早くホテルに戻るや否やベッドにダイブした私は、夜にふと目が覚めると、WeChat(中国版のLINEのようなもの)に通知が来ているのに気がついた。それはなんと、現地学生の2人から私の体調を心配する旨のメッセージだったのだ。彼らはディナーを終えて自分の家に帰宅してもなお、さも当然のように私を気にかけてくれていた。彼らの優しさに胸を打たれ、返信した後、部屋でぼっちディナーを食べ(結果的に旅行中この日だけが回らないテーブルで夕食を食べることになった)、漢方を飲んで、再度眠りについた。危うく永眠しかけたが翌朝いつも通りただの睡眠から目覚めた私は、すっかり熱も下がり翌日の午後からみんなと一緒に最終日まで行動を共にすることができた。私の人生史上この時ほど東洋医学の偉大さを噛み締めた瞬間があったのだろうか。皆さん、これからは東洋医学の時代です、漢方飲みましょう。

そこで私は考えるのだ。確かに東洋医学は優れていて、そのおかげで復帰できたのは間違いない。しかし私はやはり考えてしまうのである。もし前日に学生たちとの関わりがなかったらば、と。彼らがタクシーを呼んでいち早く私をホテルのベッドへと送還させてくれていなかったらば、彼らから体調をねぎらうメッセージがなかったらば。中国人の優しさがなかったらば。そして私はこう結論づけるのだ。彼らと出会っていなければ、体重は3kgも増えなかった、と。7日間という短い間でしたが、発熱したこともありたくさんの方々にご迷惑をおかけし、また感謝すべきことも多くありました。この場を借りて厚く御礼申し上げます。充実した時間をくださりありがとうございます。太らせてくれてありがとうございます。また太りに行きます。

聖心女子大学 現代教養学部1年 石川 春香

まず、はじめに中国研修旅行を企画してくださったパンダ杯関係者の皆様に感謝を述べたいです。中国大使館で行われた授賞式を含め、パンダ杯のみんなと過ごした9日間は一瞬のように感じましたが、得るものがとても多く、そして私にとって1つの区切りとなったとても素晴らしい機会でした。本当にありがとうございました。今回の感想文を書くにあたってなにを書こうかととても悩みましたが、私が北京、西安に行って改めて感じたことや新たに発見したこと、そしてそこから見つけた私の目標を書いていこうと思います。

まず、改めて感じたこと。それは、「言語の壁はとても厚いようだが、実はお互いが協力

し合うことでその壁は少しずつ崩すことができるのだ」ということだ。中国語しか話せない中国人と日本語しか話せない日本人。この 2 人は一見コミュニケーションが取れないように思えるが、実際はジェスチャーや表情、声のトーン、そして相手に伝えたいという意思と理解しようとする気持ちによって話すことができる。もちろん、政治や歴史について語るとなると、言葉の壁はとて大きく感じるだろう。しかし、「これ美味しいね」「私これ好き」「一緒に写真を撮ろうよ！」というとても簡単なものであれば、意思疎通ができるのだ。むしろ、伝わらないだろうと思っていたことが伝わると一瞬でお互いを理解し合える友達のようにになれる。私は、ここで研修旅行参加者の南部さんの言葉を思い出した。「民間外交の大切さ」だ。私は今まで外交とは政府同士のものであり、私たち民間人ができることはないと思っていた。しかし、政府外交とは違うところで行われる民間外交とは、人と人との関わりによって変化が生まれるとても暖かいものだった。たとえば、上に挙げた少しの配慮と気持ちで相手との距離が短くなるということである。そして、この「民間外交」が私にとっての新たな発見である。

新たな発見というより、新たな見方という方がしっくりくるかもしれない。私は今、日本と中国におけるかの民間外交が発展していくことを切実に願っている。なぜこんなにも民間外交という言葉にこだわるのかというと、私は前回の作文で広州に住んでいたこと、中国人の優しさを感じたことに少し触れたが、これも民間外交の 1 つだったのかなと感じたからだ。政府同士の仲が陰悪であっても民間人同士はお互いに助け合うことができる。それを身に染みて感じるからこそ、民間外交に対する意識が強くなっているのだ。

世の中には多くの人が日中関係のために努力をしている。これは、人民中国雑誌社の方々のお仕事をうかがったことで知った。日本の情報をいち早く中国に伝え、また中国の情報をいち早く日本に伝える。日本や中国の本当の姿を知ることができるこの雑誌はどれだけ日中関係の緩和に繋がっているのだろうか。また、パンダ杯の始まった時期は日本と中国の関係が最悪の時であったことを知った。あれから 6 年が経ち、今は良好になりつつある。私は、これは政治家同士の努力だけでなく、多くの一般人がありのままを知ろうとした好奇心とそれをサポートした方々の力が大きいと思う。私の過ごした環境では中国についてあまり良いイメージを持たない人が多かったが、もっと視野を広げるとこんなにも多くの、そして素晴らしい方々が日中関係のために尽力している。そう考えると、私がずっと感じていたコンプレックスはとても小さいものだったなと思った。

私は、これからも中国を深く知りたいという気持ちを忘れずに、日本と中国の違いや共通点を知って情報発信できる人になりたい。そのためには、やはり言語の勉強を怠らずに続けることが大事だと思う。また、さまざまな情報を見ることで偏りのない目を養いたい。そして、10 年後には第二の故郷である中国と日本の民間外交を促進できる人になりたいと思う。これが今の私の目標だ。

日中の古代から続く関係を感じて 民間交流の重要性

今年の G20 で安倍総理が「日中手を取り合って新時代を築いてゆきたい」と述べた。テレビ越しから見た両代表の姿は、まだまだぎこちないが、発言からお互いに歩み寄ろうとしているようにみとれる。ゆっくりだが確実に両国の絆が修復している。感動を覚えたことを今でも覚えている。

今回の訪中研修で 2000 年以上前の清の始皇帝の墓や阿倍仲麻呂と李白の友情がわかる阿倍仲麻呂記念碑や空海ゆかりの地を訪れた。

こんなにも昔から日中はつながっていたことに感銘を受けた。私の幼い頃、日中関係は最悪だった。テレビをつければ、連日中国で起きている反日デモの映像や中国の反日教育について映し出され、国際友好を願うはずの愛・地球博では、中国館にだけ警察がいた。そのため私の初めて感じた中国に対する感情は日中の仲の悪さだった。

しかし自身の留学経験そして今回の訪中研修から、この国の人々は、温かく、優しく、そして努力家ということを知った。私は日中の力になりたいと改めて、強く思った。そして今までの日中の長い歴史の中で、批判も受けながらも日中友好関係のために尽力を尽くしてきた人々、今回のパンダ杯に関わった皆様々に改めて感謝した。

今回できた中国の友人たちは、謙虚に日本の文化、日本人のきれい好き、ドラマを誉め、日本から学ぶべき部分があると私に伝えてくれた。他に環境問題においても同様だ。中国は今グリーン発展に力を入れ、エコ文明建設を推進している。人民中国社長である陳文戈様は、筆者が参加した人民中国と日本科学協会が主催するパンダ杯 全日本青年作文コンクール受賞者歓迎会の席でこう述べた。中国は環境問題において手本としているのが、1950 年代～1970 年代、同じように高度経済発展により公害問題を引き起こし、その後解決させた日本の姿である。

私はその話を聞いたとき、今の中国の姿はまるで、遠い昔、中国の発展から学び、国を発展させようと意気込む日本の遣唐使のようだと感じた。同時に中国人の勤勉で貪欲な姿は、まるで日本を先進国へと導いた昔の日本人のようであると感じた。

今の日本文化の基盤と発展は遠い昔の中国文化が影響している。そして今、現在の中国文化は日本の新しい言葉やアニメそして環境問題などの国の発展においても影響している。

このように日中はお互いに学び学びあい成長を遂げていったといっても過言ではないであろう。日本も中国から学ぶべき点はたくさんある。

安倍首相は言った。「これからは日中新時代である」と。

その裏には、多くの民間交流の支えがあったからこそだと私は思う。そして私もその恩恵を十二分に受けた。だからこそ思う。

お互いがお互いを高めあえる存在関係を築きたい。そして日中台の微妙な関係も少しずつ崩れていきたい。その姿を目指すことこそ、今まで日中台の発展に努めてきた人々に恩返しし、意思をつなぐ方法だと思う。

総じて、民間交流は重要である。

昨年に引き続き、Panda 杯受賞者の旅行に参加させていただきました。毎回、新たな発見があり、充実した一週間となりました。

北京で一番印象に残ったのは「郭沫若故居」です。私は、郭沫若については文学学者という程度の認識でしたが、実は、日本と大変所縁のある人物で、今の私ぐらいの年齢で日本に渡り、日本語を勉強し、九州大学で医学を学んだそうです。このことは、中国語を勉強している私にとって、とても刺激的でした。また、魯迅とも交流があり、魯迅に向けて綴った手紙は達筆な日本語で書かれており、非常に感動したと同時に、郭沫若の魯迅や日本に対する深い親愛のようなものを感じました。

西安では、世界遺産の「兵馬俑」見学と、ミニ兵馬俑づくりも楽しかったです。また、「興慶宮」では、阿倍仲麻呂や李白が 1000 年以上も前から日中の友好に関係していたことを知り、今、私たちがこうして訪れることができるのも、昔を辿っていけば、彼らのおかげかもしれません。彼らからバトンを受け継いだ現代の私たちの役割は、互いの文化や習慣を理解し合いながら、日中の友好をより深めていくことだと思いました。

「必ず再訪したい！」そう思えるような貴重な研修旅行であった。この研修旅行は自分の貴重な財産となるのは間違いない旅であった。こんな素敵なプログラムになったのも、人民中国雑誌社の皆様、日本科学協会の皆様、そして素晴らしい仲間たちに出会えたからだ。心から感謝申し上げます。

自分にとって、この研修旅行のテーマは「日中関係について考える」ということであった。ここ数年日中関係は確かに良いというように報道されている。ただ、実際にはどういった意見があるのかが気になっていた。

私はこの問いに対する回答を少しは得られたのかなと思う。私なりに出した答えは、「過去は史実として考え、忘れてはならない。しかし、その事実についていつまでも束縛されるのではなく、新たな一歩を歩みだしていく必要がある。それを達成するには、誠実さと善意をもって接することが必要である」と。これは、西安から北京への帰りの夜行列車での賈さんとの会話でもそうであったし、西安・北京との学生交流の際にも同じことを聞いていた。また、私はこのありがたみを様々な場面で痛感した。西安の食事会では、私が中国語をしゃべることができないながらも、お酒を飲み交わしつつ、非常に楽しい時間を過ごすことができた。こういった雰囲気を作ってくれたのも彼女が誠実さと誠意をもって接してくれたからだと思う。また、北京で史跡を訪れた際には、際限ない私の質問に対して、毎回しっかりと答えてくれた。真剣な質問から、何気ない話題まで何でも応えてくれる彼らに誠実さと誠意を感じた。このように、彼ら彼女らから交流において重

要な心構えを学んだ。今後は彼ら彼女らが訪日した際に、私が誠実さと誠意をもって対応していきたいと思う。

今回の研修旅行では、北京および西安での学生との交流を通して、色々な知識を授けてもらうとともに、人の温かみを痛感した。また、三蔵法師や空海、郭沫若など日本とつながりが深い人たちの歴史を学ぶことができた。自分も、昔から続いてきた日中関係をさらに発展させるとともに、今回できた友達と連絡をとりつつ、何かしらの形で恩返しすることができたらいいと思う。

### 郁文館夢学園 高校2年 張替 千翔

今回中国に行かせていただいた張替千翔です。この度はパンダ杯関係者各位、パンダ杯作文コンクール及び中国研修を開催して下さり、本当に有難う御座いました。私は父が今中国で働いておりそのおかげで2回行ったことがありましたがそれはただの観光で中国について知るという機会ではありませんでした。しかし今回パンダ杯で受賞させていただき中国研修に行かせていただいて新たなに得られた学びがたくさんありました。私が1番印象的だったのは中国の学生の方々と交流をしながら観光をしていったものでした。政治的な観点からすると昔日中関係は良いものとも言えなかったので学生の方々と会う前は少し私は緊張していましたが実際に会ってみると、とても優しく日本の文化などに興味があると言っていました。殆どの学生達は日本語を勉強していて日本に対して興味があるというのも納得できましたが一部の学生は日本語を勉強していないのにも拘らず私達と関わるボランティアに申し込んでくれました。それは何故かと聞くと海外の方とお話する機会はそう多くないから自分でできる限りそういう機会があれば挑戦してみたいとおっしゃっていて、とても驚き、中国の学生の方々はとてもハングリー精神があるな。と感じました。私は学校のプログラムで海外や国内でも普段いけないような場所に行く事はありますが自分から積極的に色々なことに挑戦しようという考えが無かったのでこれを言われた時驚いたと同時に自分も見習いたいと思いました。他にも色々な経験をさせていただきその度に学ぶものがありました。今回の研修は私にとってとてもいい経験になりました。本当にありがとうございました。

### 日野 鈴香

今回の旅で、私は色々なことを学ばせてもらった。

日本文化の源流である中国。その歴史や世界をリードする発展、文化や食事、人々との交流。

私の人生の中で最も濃密な1週間だった。

今回、私にとって最も大きい収穫だったことは「個」を知れたことである。

日本にいて中国を語る時、私達は海の向こうにある広大な景色ではなく、画面の向こうに映される、フィルター越しに遮られたものや人を想像しがちである。

私は今回の旅で、多くの中国人の友人を持つことができた。北京や西安を旅する中で、中国語を教えて貰ったり、逆に日本語を教えたり、一緒に写真を撮ったり、たくさん話をして、たくさん笑いあったり……。

日本に帰った今、中国を連想するとき私は真っ先に中国人の友人の、暖かい笑顔や声が目に浮かぶ。

国を知るために最も大切なことは、歴史を勉強することでも、言葉を勉強することでもなく、個人を知ることだと私は今回の旅を通じて考えるようになった。

国を作るのはたった1人の大統領ではなく、その国に住む一人一人の国民である。個を知ることが国を知る第一歩だ。

私は中国の素晴らしい友人を通じて、広大な中国を新しい視点で眺めることができた。1週間毎日様々な場所を訪れたが、1人では出来ない発見や景色を楽しませて貰った。

日本には「百聞は一見にしかず」という有名なことわざがあるが、まさにその通りだ。本やインターネットを通じて見る中国と、実際に目にした中国はあまりにも違った。あまりにも美しく、力強く、雄大で、そして暖かかった。

私は四国に住んでおり、去年の西日本豪雨災害では中国の家族に助けて頂いた。今回の旅は恩返しの目的もあったのだが、返すどころか更に多くの優しさを中国の方々に頂いてしまった。西安には四国八十八ヶ所巡礼の起点、青龍寺がある。八十八ヶ所巡礼では全ての人が「祈り」を抱え、四国を巡る。何かを抱えた人、何かを得たい人、何かを無くした人……旅の終わりに救いを求め、様々な人が今日も四国を巡っている。

そして、私もまた祈りを抱えて四国を巡るつもりだ。中国の方々への感謝と日中友好を願い、一つ一つ巡っていくつもりだ。

中国の良さは訪れてみないと分からない。人の暖かさは触れてみないと分からない。百聞は一見にしかず。私が今回感じた中国の素晴らしさを、巡礼を通して四国の人々に伝えていければいいと思う。

和歌山工業高等専門学校 環境都市工学科2年 瓜生田 彩月

訪中旅行が終わり、今、振り返ってみるとあの1週間は夢のようでした。中国で撮った写真や購入したお土産を見ると楽しかった時間が思い出されます。1番に思い出されるのは訪中団で

きた友達や中国で出会った学生ボランティアの方々の姿です。私は最初、初めての海外でもあったのと、訪中団の方にお会いするのが初めてだったので話せるか不安でした。しかし、前日のホテルで集まったときから皆さん優しく話しかけてくださって本当に嬉しく、不安なんてとんでいくほどでした。西安で飲んだタピオカ、新幹線や寝台列車でしたトランプゲームも良い思い出となりました。また、私は英語も中国語も上手く話すことができないので、学生ボランティアの方と交流することは難しいかもしれないと思っていましたが、私のレベルに合わせて会話をしてくださったので、ありがたかったです。最後には別れるのが惜しくなっていました。

見学で1番印象的だったのは秦の兵馬俑です。私は幼い頃に映画を見て以来、ずっと実物を見たいと思っていました。実際に見てみると想像していたよりももっとずっとスケールが大きく、圧倒されました。中国の素晴らしい歴史も学ぶことができ楽しい時間を過ごすことができました。

人民中国雑誌社の皆様、日本科学協会の皆様、1週間本当にありがとうございました。今回の旅で中国に対する見方が大きく変わりました。私は以前、テレビ番組で放送される中国の様子や周りの人の中国に対する意見を聞き、少し偏った考えを持っていました。自分の意見というものがあまりなく、表面しか見えていなかったのです。でも今回の訪中旅行で本当によくくださり、また、中国の素晴らしい歴史や文化に触れ、やっぱり実際に行ってみないとわからないこともあるのだと気付かされました。中国と日本は近い存在ではありますが、まだまだ問題はたくさんあります。高校生の私にはできることは少ないかもしれませんが、しかし、いつか大人になったときに今回の恩返しとして日本と中国をつなぐ架け橋になれる存在になりたいと思います。そのために今から自分にできることは中国について理解を深めることです。だから、私は中国に関する知識を増やし、いつかまた中国を訪れたいと考えています。

最後になりますが素晴らしい時間を与えてくださって本当にありがとうございました！

## 《 Panda 杯運営実行委員 》

東京学芸大学 教育学部3年 小嶋 心

なぜだろう。なぜ、中国がこんなにも好きなのだろう。その答えは中国のどこかにまだ埋もれているのかもしれない。

中国に着くと、唐突な懐かしさに包まれることがある。建物を見ても、空を見ても懐かしい。幼少期を中国で暮らしたわけでも、中国に祖先のルーツがあるわけでもない。この全く不思議な感覚は一体どこからきているのだろうか。

6日目、寝台列車に乗車した時の出来事だった。エスカレーターが整備されていない駅構内は、保安検査場からプラットホームまでの階段を10kg以上あるキャリーバッグを抱えて登るには、想像以上の苦労を要求した。人の流れは早く、皆下を向き黙々と荷物を運んでいる。しかし、その脇では荷物を運ぶ代わりに金銭を要求するおばさんが私のような観光客がやってくるのを手ぐすね引いていた。無視をして、無視をし続けると、緑の鉄道車体が見え始める階下の途中で、おばさんの姿は見えなくなっていた。

再び私の方へ視線を向けたのは、1人の少年とその母親だった。少年はおそらく10歳前後と見え、母親の方は30代前半だと見える。親子は寝台列車の通路に設置された椅子に座り、1段目のベッドに腰掛ける私を見つめて、母親が何か話しかけてきた。どうやら、その親子のベッドは同じ列の3段目のようで、もしかしたら私の荷物の多さに不満があるのではないかと考えた。中国語が堪能な訪中団のメンバーを呼び、通訳をお願いすると、その母親は、荷物は人があまり乗り込んできていない今のうちに棚に載せておくのがいいというアドバイスをしてくれていた。

その時に、私の中で相対するはずの荷物運びのおばさんとこの親子、そしてよく分からないあの懐かしさが一つの糸で繋がった。そこにあるのは、壁のない干渉という共通点だった。中国人と日本人は顔が似ていると言われるが、正直それ以上の違いがある。例えば、服装だ。このような言い方すると中国人には悪いが、寝台列車の駅や車内にいた中国人は、決して格好がお洒落とはいえない。荷物運びのおばさんはボロボロの服を着ていたし、親子の服装も北京に遠出するにはあまりにも普段着すぎるような格好だった。西安にいた我々日本人は、中国人からすれば気張った服を着ているように感じられたのかもしれない。もし、逆の立場だったら私は萎縮して声などかけられない。違いを感じる他者へは極力関わらずにやり過ごそうと考えてしまう。しかし、荷物運びのおばさんは生活するために、母親はキョロキョロ車内を見回す困った日本人のために、背景にある思いに雲泥の差はあるが、とにかく声をかけてくれた。ここに、私が感じる懐かしさがあった。

日本は今年、平成から令和へと時代が変わった。思い返すと私が小学生や中学生の平成の時代、社会は、地域住民の結束が強く、かつ閉鎖的だった。そこには、声をかけるという文化があったと思う。老若男女、貧富に関わらず、その地域に住んでいれば互いに声をかけ合い、良い面も悪い面も含め干渉するのが当たり前だった。しかし、平成も終わり頃、次第に隣人に対する関心は薄れた。画一化された社会は例外を許さず、周りに標準を合わせるようになった。服装然り、振る舞い然り。平均化された対人同士は結局、内面で壁を各々築くのだ。挨拶は交わさない、極力知らない人には目線も交わさない。個人が周りに合わせて個人で完結するライフスタイルが令和の日本人の在り方なのだと思う。寝台列車に乗る過程で、私は少し前の日本を見た気がする。そ

して、壁のない人間関係を久しぶりに経験した。中国には、経済的な要因、性格的な要因など様々なファクターによって未だ声をかける文化が生き残っている。ドライな風が吹き抜ける今日の日本において、中国は愛おしい存在だ。

中国の人や文化、歴史までもが、懐かしい響きを纏って、まるで自分に関連することのように真っ直ぐ吸収される。中国を訪れた先にある、ナショナリズムの倒錯も、もはや幻ではなくなるかもしれない。

### 日本女子大学 人間社会学部 2年 日暮美音

現地の学生や人々と触れ合いながら濃密な1週間を過ごさせていただきました。

北京・西安をめぐる旅は目に映るもの一つ一つがとても新鮮で、自身の更なる視野の広がりにつながったことを実感しております。

私が特に印象に残ったことが2つあります。一つは北京・西安での現地学生との交流です。最初は国籍も母語も違う方と一日を共にすることへの不安があり、話はずむような話題を見つけられるかとハラハラしながら一日をスタートさせましたが、蓋を開けてみると好きな映画や音楽の話で盛り上がることができました。話したいことがあるが、うまい中国語の言い方が見つからず、うぐぐとなってしまう時も、目を見ながら優しく「大丈夫だよ、ゆっくりでいいよ」と笑顔で言葉に耳を傾ける姿勢を見せてくれて、まるで言葉と言葉ではなく心と心で会話をしているようでした。昼食の時は話が途切れがちだった一行が、夕食の席では笑い声が絶えないほどに仲良くなっていたのが印象的でした。また、雑誌社の方が「日中友好事業は目に見える功績が少なく、くじけそうになることも多いけれど、こうやって良い一日が過ごせると、それだけでやってよかったと感じる。」とコメントをなさっていて、その真摯な姿勢に胸を打たれ、泣きそうになると同時に深く考えさせられました。その際に交流した学生の方とはいまも微信で会話が続いていて、日本の歴史単語や、正しい中国語の言い回しなどをお互いに質問しあっています。繋がった縁がより強いものになるよう、これからも自身にできる日中交流のあり方を考えていきたいです。

二つ目は北京から西安に移動する際に使用した寝台列車です。日本では寝台列車は今や高速鉄道にとって変わられ、移動手段としてはほぼ使われず、楽しみやレジャー感覚で使用されていません。中国ではまだ移動手段として人々の間で一般的に使用されている移動手段であり、生活に深く根付いています。列車は私たちのような若者だけではなく、小さい子やはしごを登るのがやっとなお年寄りの方も乗車されていました。一週間の訪中旅行の中で、寝台列車で過ごした一夜が、一番、リアルな中国人の生活を垣間見れたと感じております。空港からの帰り道で友達との会話の話題に登ったのもこの一夜のことでした。彼女はこの一夜を「まるで、片付けていない友達の部屋に上がり込んだような感覚だった。」という例え話で話していました。違う角度から見る中国もとても興味深いものでした。貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。